

文化的景観シンポジウム2020

かつねまの 美しさに、



目 次

ご 挨 拶

シンポジウム開催中止の経緯について

パネラー紹介

【文化的景観について】

「勝沼らしさ」の源水ー文化的景観の価値と受け継ぎ方・活かし方

菊地 淑人 . . . 1

【専門家が薦めるかつぬまの宝】

伊豆半島の衝突と勝沼のブドウ栽培・ワイン文化

興水 達司 . . . 6

勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観はいつ現れたか

小野 正文 . . . 11

勝沼における民家について

小林 直弘 . . . 13

【かつぬまの魅力】

甲州市勝沼町の集落形成に関する研究

上田 あゆみ . . . 15

学校教育における地域学習の現状と課題及びその効果的手法に関する試論

岩田 美耶 . . . 23

高付加価値の果樹を観光資源とした農村における観光地マネジメント手法の一考察

高橋 瑞季 . . . 30

【かつぬまに思いを寄せて】

勝沼と歩んだ4年間

岩田 美耶 . . . 36

観光を通じて勝沼地域の魅力を繋げるために

高橋 瑞季 . . . 39

ご 挨拶

勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観は、江戸時代から続いてきたブドウ栽培と明治期に誕生したワイン産業を中心に、ブドウを振る舞った甲州街道勝沼宿、大量輸送が可能となった鉄道関係遺構、大水害後に造られた水防遺構、生活に密着した行事などの要素が積み重なってできた景観です。

甲州市・甲州市教育委員会は、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群」をテーマに、山梨県内初の国の重要文化的景観の選定を目指した取り組みを行っております。平成28年度から平成30年度の3ヵ年にかけて、国立大学法人山梨大学、山梨県立大学、工学院大学の協力を得て価値調査を実施し、平成31年3月に調査報告書を刊行しました。また、本市への愛着を深めるとともに、景観保全・継承の機運を高めるべく、講座や散策、教育現場と連携したワークショップなどを実施しています。

甲州市教育委員会文化財課では、甲州市文化的景観シンポジウム「かつぬまの美しさに、」を令和2年2月28日（金）に開催すべく、準備を進めてきたところですが、新型コロナウイルス感染症対策に基づき中止といたしました。

このようなお知らせになり、シンポジウム開催に係る関係者一同残念ではございますが、本要旨を通して、調査に携わったパネラーの皆様から見た「かつぬまの美しさ」をお伝えできれば幸いです。

引き続き、全国に誇れる勝沼地域の景観を守り、次世代へつなげるべく取り組みを続けてまいりますので、ご理解ご協力のほどよろしくお願いをいたします。

甲州市教育委員会
教育長 保坂 一仁

シンポジウム開催中止の経緯について

甲州市教育委員会文化財課では、甲州市文化的景観シンポジウム「かつぬまの美しさに、」を令和2年2月28日（金）に開催すべく、準備を進めてきたところですが、新型コロナウイルス感染症対策に基づき中止といたしました。その経緯についてご説明いたします。

政府は、1月30日に閣議決定で「新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置し、2月18日には総務省から「新型コロナウイルスの発生を踏まえた対応について」の通知が送られました。

それを受けて甲州市では、2月19日に市長を本部長とする「甲州市新型コロナウイルス感染症警戒対策本部」を設置し、庁内の情報共有を図りました。この時点では会議・イベントの開催は担当課の判断とすることとし、文化財課ではシンポジウムを開催する予定でした。

2月26日、政府の対策本部会議が開催され、全国的なスポーツや文化イベントの実施自粛が、また、翌27日には3月2日からの小中高校の休校が要請されました。

そのため、28日に文化財課において協議した結果シンポジウム開催を断念し、同日に市の警戒対策本部会議において中止の報告をいたしました。

なお、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」については、平成28年度から3ヵ年をかけて調査を実施し、山梨県で初の重要文化的景観の選定を目指し取り組みを続けており、シンポジウムは調査の成果を調査に携わったパネラーの口から直接語っていただくという趣旨で企画してきました。

文化財課ではシンポジウムの中止を決定すると同時に、パネラーの方々に発表内容をまとめていただくことを改めてお願いしました。パネラーの目を通して、地元にお住まいの方には当たり前に見える風景でも、「かつぬまの美しさに、」繋がる風景であることを感じていただければ幸いです。

甲州市教育委員会
文化財課長 飯島 泉

パネラー紹介

興水 達司

公立大学法人山梨県立大学地域研究交流センター 特任教授

甲州市文化的景観保存活用計画策定委員会 会長

菊地 淑人

国立山梨大学法人総合研究部生命環境学域 准教授

甲州市文化財審議会 委員

小林 直弘

学校法人工学院大学建築学部 非常勤講師

甲州市文化財審議会 委員

小野 正文

甲州市教育委員会文化財課 文化財指導監

甲州市文化財審議会 会長

財団法人歴史博物館信玄公宝物館 館長

上田 あゆみ

学校法人工学院大学大学院工学研究科建築学専攻 2年

岩田 美耶

国立大学法人山梨大学生命環境学部地域社会システム学科 4年

高橋 瑞季

国立大学法人山梨大学生命環境学部地域社会システム学科 4年

「勝沼らしさ」の源泉 — 文化的景観の価値と受け継ぎ方・活かし方

菊地 淑人

山梨大学大学院総合研究部生命環境学域

1. 日本を代表するブドウ産地・ワイン醸造地の誇りに溢れた地域

土地の使い方とその背後にある地域の営み（生活・生業）という観点から勝沼地域を捉え直す調査を、甲州市教育委員会文化財課と県内外の諸大学（山梨大学、山梨県立大学、工学院大学）が連携して平成 28 年度から始めた（注 1）。

山梨大学では、土地の使い方の今と昔、さらには景観と結びついた生活や生業の遷り変りの一端を把握するため、教員・学生がさまざまな観点で、畦道を含めて、地域を隈なく歩き、調査を重ねてきた。盆地の内陸性気候で夏は暑く、また時に風が強く吹き込むという勝沼地域の気候的な特徴を反映し、また昨今の気象条件の中では夏の夕方は往々にしてゲリラ豪雨に見舞われ、「雨ニモマケズ風ニモマケズ雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」（注 2）といった宮沢賢治の言葉を体現したような調査であった。

そうした調査において、調査内容とは直接関係ないものの、調査チームはブドウ・ワインの歴史文化に結びつく勝沼地域の姿を目の当たりにすることになる。例えば、マンホールなどにはブドウが刻印されたものは当たり前、土屋龍憲・高野正誠のシルエットが刻印されたものまである。このシルエットを見て、おそらく地元ではすぐに 2 人の名前が浮かぶのであろうが、おそらく勝沼地域の関係者以外でこれが誰だかすぐにわかる人はよほどの勝沼マニアであろう。しかし、こうしたマンホールなどの存在に加えて、その後の取り組みを重ねる中では、調査チームはさらに衝撃を受けることとなる。なんと、祝小学校、勝沼小学校などの 3 年生の中にもこれが誰だかすぐに回答できる児童がいるのである。これこそ、小さい頃から擦り込まれた文化なのではないかと感じざるを得ない。

調査と関係するのかわからないかわからない話だが、こうして、我々は、他の地域にないブドウ・ワインとディープに結びついた勝沼のモノやコトを発見するたびに、「またか！」と喜びと地域に対する尊敬が入り混じった感覚を抱くことになった。

その後の話だが、研究室学生が卒業論文の一部として、小学校の社会科の授業で使う副読本の内容について、山梨県内の市町村刊行のものを対象に分析した。その結果、市町村の平成の大合併で、旧町村レベルの地域に関する教育が薄くなったことは県内に共通するが、それ以上に重要なこととして、合併前の町村レベルでも扱われている内容にはムラがあることが指摘された。甲州市の場合でも、旧塩山市、旧大和村の副読本は地域を題材にしながらも内容は地域の産業など極めて一般的であった（県内の他市町村と共通する）。他方で、旧勝沼町は、ブドウ栽培の歴史、現在の生業なども含め、かなり深めであるという。そして、こうした扱いは、大合併が進んだ北杜市の旧町村などと比較しても、極め

て特殊だという（注3）。

こうしてみると、ブドウ栽培・ワイン醸造に根ざした地域のアイデンティティは学校教育も含めて継続的に形成されてきたものであり、そうした誇りがビジュアル・アイデンティティとして土屋龍憲・高野正誠2人のシルエットの作成（1989）に繋がり、現在もそれがさまざまな箇所に使われている。調べれば調べるほど、勝沼地域は他の地域にはない特色をもっているのである。

歴史資源やそれに根ざしたストーリーは場所に固有のものであり、他の地域にないその土地ならではの魅力である。勝沼はそれをすでに顕在化させており、地域の中では当たり前のように共有されている。それをどのように言語化して域外に発信できるか、あるいは景観や農業、地域プロモーションなどの施策に反映させられるかといった視点が、より深く地域の文化を活かし、将来にわたって育んでいくためには不可欠である。こうしたことは、観光地形成といった観点からも国内外で着目されており、今後の勝沼地域の観光地形成にも意義のあることであろう。

2. 「勝沼らしさ」を体系的に整理する

目の前に広がる勝沼地域の景観は、この地域にしかないものである。それは、勝沼地域における歴史、別の言葉でいえば生活・生業の積み重ねによって育まれてきたものである。それを失うことは勝沼地域の骨格を失うようなものであろう。したがって、こうした目の前に広がる景観とそれを形成してきた自然・歴史・文化の関係性は、勝沼地域のアイデンティティの凝縮であり、「勝沼らしさ」の源泉ともいえる。その関係性は地域では当たり前のように捉えられていることに過ぎないのかもしれないが、改めて体系的に読み解くことは、今後の地域の進む道を考えるうえで重要である。

勝沼地域のブドウ栽培、ワイン醸造の発展を考えるうえで、甲府盆地の東の玄関口という立地的な優位性が果たした役割は大きい。こうした立地にあって、近世には甲州街道、さらに近代には鉄道（中央本線）開通、さらに戦後には新笹子トンネルや勝沼バイパス、中央自動車道開通など、流通往来を支えるインフラ整備が地域の生活・生業の発展に大きな影響を及ぼしてきた。ブドウ・ワインの出荷もしかり、モータリゼーションの流れの中で戦後に多くの観光客がブドウを目当てに押し寄せ、「露地のブドウ園」にはじまる観光ブドウ園の広がりもしかり・・・。

そして、扇状地という特殊な環境で営まれてきた暮らしも勝沼地域の景観形成に大きな影響を与えてきた。例えば、近世には、土地の高低差を利用して、セギなどを張り巡らせ、セギが密に張り巡らされた場所には水田が多く営まれた。さらに、近代にはセギの水を利用して水車を回して糸をつくり、岩崎を中心に製糸工場が広がった。こうした時代が前提にあり、そこから、ワイン・ブドウへとシフトしていく。こうした扇状地における生活・生業の

営みの積み重ねによって、現在の景観が成り立っている。

さらに、時代の流れに応じてブドウの栽培品種などを変えてきたし、江戸から明治時代にかけての水田を中心とした時代に比べて畑の合筆なども進むなど、大きく変化してきた部分もある。他方で、ブドウ栽培・ワイン醸造とともに歩んだ近代以降の歴史は地域の大きな誇りであり、現在でも岩崎を中心に甲州種やデラウェアのブドウ栽培が盛んである。こうした歴史は、勝沼の産地としてのブランド力の源泉ともなっている。その点で、地域に受け継がれるブドウ栽培・ワイン醸造に関する歴史的遺産は、景観をかたちづくる今に生きる要素といえる。こうした地域の「誇り」こそが、勝沼地域の景観をつくり上げてきたもっとも強い原動力といえるのかもしれない。

3 「文化的景観」とは

これらは勝沼地域に暮らす方には当たり前のストーリーかもしれない。しかし、この当たり前の積み重ねが今の景観を育んできた。こうした地域に住まう人々にとっては当たり前の、人と自然（気象、地形、地質など）の関わりの中で育まれてきた景観を「文化的景観」という。例えば、棚田、段々畑、牧草地、温泉地、鉾山町などが典型的なものである。もちろん、それ以外にも、景観の解釈の仕方（読み解き方）次第で、さまざまな場所を文化的景観として捉えることができる。

文化的景観は単に見た目としての景観を示すのではない。見た目としての景観が形成された背後にある景観をかたちづくるシステムも含むものである。景観をかたちづくるシステムとは、例えば、人と自然の関わり方、人の暮らしの営み方などであり、そうした関係性の積み重ねが見た目としての景観として表れるのである。つまり、「文化的景観を守ろう」とか「文化的景観を残そう」などと言うことは簡単ではあるのだが、「言うは易くおこなうは難し」という言葉のとおり、何から手を付けるかが難しい。「国宝」とか「重要文化財」といった文化財に指定された建物であれば、例えば、その建物の姿かたち、材料などを受け継ぎ、さらにはそうした建物を生み出す技術を残すということになる。ただ、文化的景観の場合はどうか。文化的景観を守ることは、それをかたちづくってきた地域のシステム、つまり、土地との関わり方、生活や生業における習わし、あるいは年中行事など、景観の背後にある地域のスタイルを急激に変化させずに続けていくことが、文化的景観を「守る」「受け継ぐ」ということに。それは難しいことのように聞こえるかもしれないが、例えば、連続するブドウ畑の中に、突然巨大な建物（例えばショッピングセンターなど）がつくられたら、あるいは道の拡幅がおこなわれたら、地域の方にとっても「違和感」が生じるだろう。あるいは、鳥居焼がなくなってしまったら季節感に違和感が生じるだろう。そうしたことを回避する仕掛け、違和感を地域で共有する仕掛けを「文化的景観」という中でつくっていくことが「守る」「受け継ぐ」ことに他ならない。

他方で、鳥居焼が電飾が変わってしまったらそれは違和感だろうか、時代の流れの中での

変化だろうか。これはとても難しい。例えば、時代の流れの中では仕方がないという理解もできるし、勝沼中学校の生徒による聖火リレーはどうなるのか、地域に対する愛着の醸成に影響があるのでは（ひいては人口流出に繋がるのでは）といった見方もできる。こうしたことを地域で積極的に議論し、変化を認めていく、あるいは回避していくことも、文化的景観を「守る」「育む」ための取り組みといえる。

そうした議論のためのプラットフォーム、そして考えるための価値規範のひとつが、「文化的景観」といった考え方なのである。それ故、文化的景観は、行政がルールをつくる、あるいは補助金を出せばなんとかなるものでもない。むしろ、行政、住民、事業者など、多くの人が参加し、地域を見つめ、議論し、前に進むための仕掛けをつくり上げていくことが必要であり、行政の役割はそのための種まきといえるのかもしれない。

4 文化的景観を活かし、育てるために

文化的景観という観点から勝沼地域を捉え直す調査と並行して、平成28年度から、山梨大学と甲州市教育委員会では、文化的景観の価値を共有するための、さまざまな取り組みを重ねてきた。散策イベント、『かつぬま旬報』や文化的景観パンフレット、小・中学生の自由研究向けのミニブックの発行、あるいは小学校における地域探検授業の開催、企画展の実施、小中学生向けの絵本・紙芝居の作成など多岐にわたる（注4）。

それぞれがさまざまな狙いをもってやってきたものであるが、勝沼地域における取り組みでは、特に学校教育の現場における取り組みを重視してきた。それは、勝沼地域ではすでにジベ処理実習や聖火リレーなど、他の地域には見られないさまざまな取り組みが、長年にわたっておこなわれてきていることにある。こうした取り組みの中に、文化的景観という観点が盛り込まれれば、これまで以上に、景観意識の醸成や地域に対する愛着に繋がるのではないかと考えたからである。

また、勝沼地域の文化的景観の担い手は地域だけではない。観光地であり、多くの観光客が来るからこそ、そうした層にも景観の継承に対する共感を抱いてもらい、交流人口・関係人口として勝沼地域を継続的に応援してもらう必要もある。文などでの配布もおこなった。観光客の手にも多く取られたようで1年間で印刷部数の大多数が配布された。

農村観光は価値を伝えないと単に「緑豊かな場所」「美味しい食べ物が食べられる／買える場所」で終わってしまう。実際、勝沼ぶどうの丘を訪れる観光客に対して実施した調査からはそうした傾向が読み取れ、甲州街道沿いや岩崎までは観光客が流れていないことがわかっていく（注5）。

勝沼地域になぜブドウ畑・ワイナリーが多く、今の景観が育まれているのかを伝える媒体が限られている中で、それを発信することは地域づくりにも繋がる文化的景観にできることもといえる。パンフレットの作成・配布はそうしたことを実証することに繋がった。

このようなことは、今後文化的景観を進めていくうえでの種まきともいえるものである。今後はこうしたことを礎に、継続的に取り組みを重ねていく必要がある。文化的景観は、国

の文化財として選定されることが目的ではなく、その後の「ケア」がもっとも重要であるのだから。

5 おわりに

上野晴朗は、ワイン百年にあたり、そこで為すべきことを、以下のように述べている。

ワイン一〇〇年の真の記念行事というのは、一人、二人の業績や、足跡をいたずらに称えることではなく、その時代の人々の汗と苦闘を改めて見直し、今日の歴史に照合させて、一つの糧とすることではないかと思われる（注6）。

40年以上が経った現在でも、この言葉はまったく色褪せていない。むしろ、社会状況が大きく変わった現代だからこそ、言葉の発する重みはますます高まっているのかもしれない。

文化的景観は土地の履歴や生業との関係性を読み解き、そうした延長線上に地域の将来に必要なことを考え、実行することである。「ブドウがあります」「ワインがあります」を越えて、「なぜここがブドウの名産地であり、ワインの銘醸地であるのか」が地域の魅力の軸となった時、勝沼地域の景観の育み方、地域の発信方法、さらにはブドウやワインの販売戦略も、さらに豊かになっていくのではなかろうか。そう考えていくと、文化的景観は文化財の事業でありながら、モノを「保存」することを越えて、豊かな地域を育むための礎であり、基幹戦略なのである。

ストーリーをもつ地域は、それを起点にさまざまな地域づくりの展開が可能である。文化的景観を「文化的景観」と名乗らずとも、おのずからそうした見方をしている地域はさまざまなポテンシャルをもった取り組みに展開している。勝沼地域においても、文化的景観をきっかけとした一連の取り組みは地域づくりの軸として据えられるものであろう。

注

（1）調査成果の詳細は、『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』（甲州市・甲州市教育委員会、2019年）を参照。

（2）宮沢賢治「雨ニモマケズ」

（3）岩田美耶（2020）『学校教育における地域学習の現状と課題及びその効果的手法に関する試論—地域資源継承のための方策として』令和元年度山梨大学生命環境学部地域社会システム学科卒業論文

（4）学校教育（小・中学生向け）の取り組みについては、岩田美耶による別稿参照。

（5）高橋瑞季（2020）『高付加価値の果樹を観光資源とした農村における観光地マネジメント手法の一考察—山梨県甲州市勝沼地域の来訪者の属性と移動手段の分析を中心に』山梨大学生命環境学部地域社会システム学科卒業論文。高橋による別稿参照。

（6）上野晴朗（1977）『山梨のワイン発達史』勝沼町役場、p. 310

伊豆半島の衝突と勝沼のブドウ栽培・ワイン文化

興水 達司

山梨県立大学地域研究交流センター

1 はじめに

甲州市勝沼町におけるブドウ栽培及びワイン文化について、その土台をなす地形や地質の特性を理解するためには、百年や千年といった時間軸を超えた“地質学的な時間スケール”からの説明が効果的と考え、この事情から今回の話題提供のタイトルとして、「伊豆半島の衝突」という言葉を私は用いた。

2 甲府盆地を含む本州中央部の大地形成史

勝沼地域は甲府盆地の東部に位置し、そこには扇状地が発達している。この扇状地のでき方については、単に甲府盆地という視点で捉えるのではなく、まずは本州中央部や日本列島の視野から読み解くべきである。その過程において、勝沼地域のシンボリックな「ぶどうの丘の成り立ち」がスムーズに理解され、同時に勝沼一帯のブドウ栽培やワイン文化の礎を歴史科学的に、あるいは物語的に知ることができるだろう。そこで、「ぶどうの丘はどうして丘になったのか？」という謎解きを主体に、以下に報告する。



写真1 南東方向から望むぶどうの丘

ぶどうの丘は、甲府盆地の東部に奇妙な丘として認められ、このぶどうの丘を構成する地盤（地層）は、“かつての南海トラフ”に堆積したものである、ということが20世紀の後半に理解できるようになった。この南海トラフ堆積物は、伊豆半島の衝突などで北に移動し、

さらに本州中央部の屈曲史を経て、現在に至っている。このような地質学的プロセスを経て、過去には海底にあった堆積物が、甲府盆地に対してその背後を形つくっている高標高の南アルプス・大菩薩山系などの山岳地域として成り立ったのである。

実際に、山梨県の地質分布を見渡してみると、甲府盆地西部の南アルプスから盆地北部の昇仙峡地域に、さらに盆地東部を構成する大菩薩山系などに及ぶ一連の山地には、四万十帯と呼ばれる地層が分布している（図1）。この地質図の群青色～ブルーに塗色されている地域（八ヶ岳山麓のそれは除く）こそ、かつて数千万年前の時代に南海トラフを埋め尽くしていた地層である。

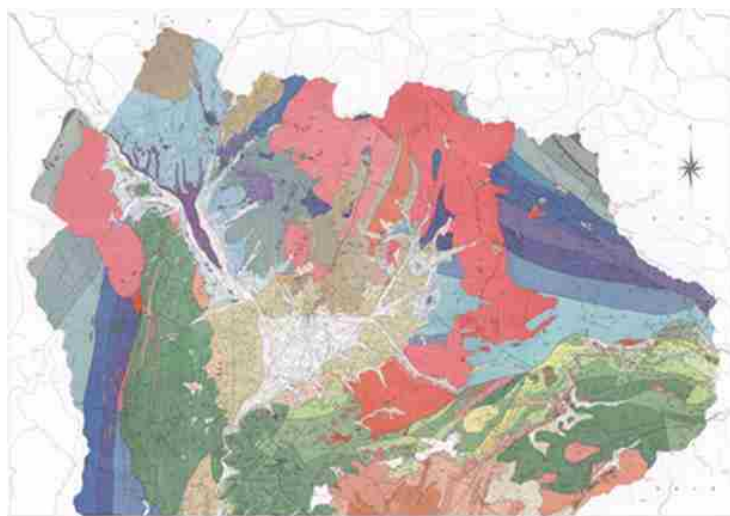


図1 山梨県の地質図（山梨県地質図編集委員会, 1970）

そもそも四万十帯が南海トラフに溜まっていた当時の、その分布は現在の四国・四万十地域の南岸沖の海から東に、現在の千葉県沖の海に至る範囲に、ほぼ直線的な形態であった。この直線的なトラフ堆積物の四万十帯（地層）が、現在我々が身近に見ている甲府盆地を取り囲むように屈曲して分布している、ということが一般にはにわかには信じられないかも知れない。この仕組みを端的に説明するのが、南の海から本州に概ね直角に向かう水平的なプレートの動きであり、今も続く伊豆半島などの日本列島への衝突事件である。

このような仕組みによる山の成り立ちも含めて、大地形成が水平的な地球表層部の動きの中で理解できるようになったのは、今から数十年前の最近のことである。そして、人が生きる百年程度の時間軸はもちろん、数千年前の文字記録などを遥かに超える時間スケールで、現在では大地形成がダイナミックに理解できる状況になってきた。この辺の詳細については、日本列島の北側の日本海の形成史にも触れる必要があるが、今回はこの点は割愛する。

結局、長い地球史を経て、現在では甲府盆地を取り囲んで分布する四万十帯としては、図2の状況にある。この四万十帯の分布に至る過程に、ぶどうの丘を含む勝沼地域の土台形成史としてのユニークな物語が潜んでいる。

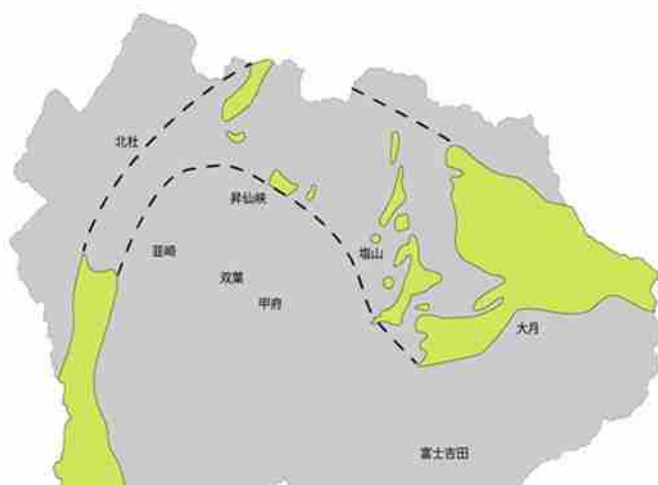


図2 山梨県内の四万十帯の分布（黄緑色の部分）

3 勝沼地域の扇状地

今まで説明してきた山を凸に形成する地球の歴史から転じて、これ以降では山地の浸食・運搬作用について紹介しよう。すなわち、高標高域から相対的に低標高の甲府盆地側に土砂運搬が活発になる過程で、甲府盆地周辺域には概して規模の大きな扇状地が形成されてきており、例えば盆地西部には御勅使川扇状地が、また盆地東部には勝沼扇状地などが見られる。この扇状地形成のプロセスを、勝沼地域につき、少し詳しく説明するため、図1の一部を塩山・勝沼・一宮地域の地質分布として拡大したのが図3である。

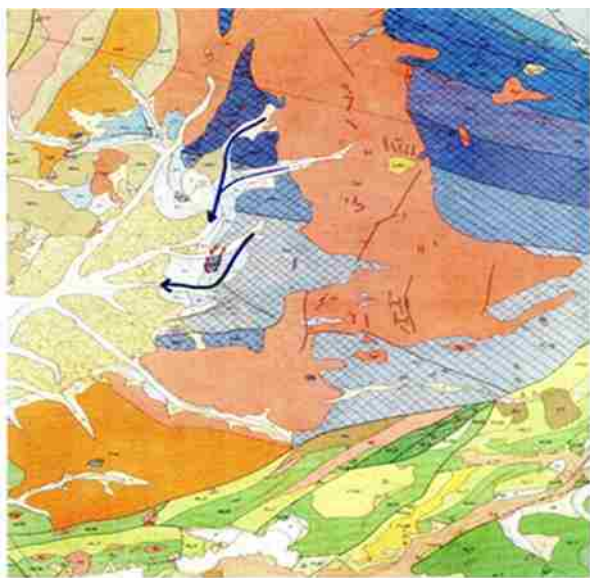


図3 塩山・勝沼・一宮地域の地質分布（山梨県地質図編纂委員会, 1970）

この図3で、青色系の中で網掛（クロス加筆）の部分が海底堆積物の四万十帯であり、オレンジ・ピンク系の地質は四万十帯に貫入した花崗岩類である。さらにこの図から、塩山市街地と勝沼町東部のそれぞれ2箇所に、網掛の四万十帯が“飛び石の分布”として認識でき、この飛び石のうち、塩山市街地のそれは「塩の山」であり、勝沼町の東部のそれは「ぶどうの丘」である。これらの飛び石は、それぞれの背後に分布する網掛地域の四万十帯と一体の地層として、かつて（約数十万年前頃まで）は分布していた。

つまり、ぶどうの丘は、その北部に分布する四万十帯の地質と一体であり、当時の河川系は現在とは別ルートが推定できそうである（図3）。その後の時間経過の中で、少なくとも今から十万年～二十万年前以降の時間幅にわたって背後の土砂流出などで、またこの間には、これら河川の流れが変化することにより、ぶどうの丘が現在のように孤立分布することになった、と考えると大きな矛盾はない。塩山駅の北方の塩の山も同様なシナリオで説明できる。

さて、これだけで、勝沼地域の大地の物語は終わらない。過去に遡って地球史スケールで勝沼の大地の仕組みが理解できる一方で、未来の勝沼やぶどうの丘を考えてみると、自然がもつ本来の姿として、継続する侵食作用によってぶどうの丘は、いずれは丘としての形態を失ってしまう運命にある。つまり、その周辺域と同じようにぶどうの丘も扇状地形になる。この点では、ぶどうの丘の一带は、日本列島形成史の重要な局面をコンパクトに理解することが可能な場所であり、しかも扇状地形成において進行状況の違うステージの地形が近接して観察できるなど、地球科学分野からは間違いなく第一級の優れた教材としての意味をもつ。このように、ぶどうの丘やその一带は、背後の山地から侵食・運搬作用が概して活発な地域であったわけである。この作用によって、勝沼扇状地が発達した。そして扇状地は、一般的に水はけが良く、そこはブドウ栽培やワイン文化の発達に適した地域ということになる。

ということで、ここまでの大地形成史からは、勝沼地域の地形・地質の特性として、背後の山地から土砂運搬が活発な地域であり、この地域を特徴づける要因として「降水量」などが多い地域と思われるかも知れない。ところが、山梨県の降水量分布を広く見渡してみると、勝沼地域はむしろ降水量が乏しい地域に位置づけられる（図4）。図4の降水量分布からすると、勝沼付近は山梨県内の年間降水量の中でもっとも少ない1500mm以下のエリアに入っている。

この降水量の多さ（少なさ）の点では、甲府盆地の西に位置する御勅使川扇状地とは明らかに違うのが勝沼扇状地である。しかも勝沼地域のように降水量の少ない山麓斜面は、甲府盆地の背後地域には、勝沼付近から北西の甲斐市双葉町に、さらに北杜市明野町・須玉町などに向かって広く認められる（図4）。ちなみに、甲府盆地の北側山麓斜面の扇状地一带に降水量が乏しい地域が分布する要因を説明するには、図4の降水量の多い地域に、高標高の富士山や南アルプスなどの3000メートルを超える山の存在が重要となる。

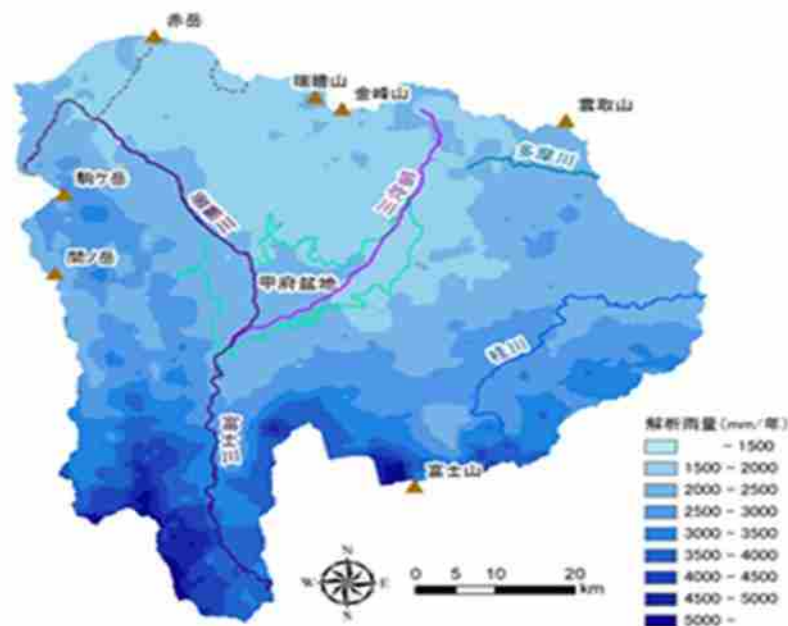


図4 山梨県内の降水量

4 まとめ

以上のように、伊豆半島の衝突に始まる本州中央部の地形・地質の成り立ちから、勝沼地域の大地の歴史を辿り、そのうえに降水量などの気象条件を加味してみると、水はけが良く降水量が乏しく日照時間が長い、という自然特性は確かに勝沼の特徴として浮き彫りにすることができる。しかし、実は同じような自然条件は、甲府盆地の背後域には勝沼付近から北杜市に及ぶゾーンとして広く認められることにもなる。つまり、地形・地質などの自然的な条件から見れば、甲府盆地周辺にはブドウ栽培にふさわしいのは勝沼地域以外にも存在する、ということになる。この状況において、勝沼地域が現在のようにブドウ栽培そしてワイン文化の本邦のフロントランナーとして牽引できるまでには、私の専門とする地形・地質の理解のうえに、さらに人文的な説明や評価などが必要となる。

この点は、他の研究分野も含む総合理解によって、先人達が築いてきた勝沼のブドウ栽培・ワイン文化の保全に努めつつ、この宝を未来に繋げたい。

勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観はいつ現れたか

小野 正文

甲州市教育委員会文化財課

1 江戸時代の景観

標題の景観は全国的に見ても特異な景観の1つである。ではいつからこのような景観が形成されたてきたのであろうか。

ブドウについては、雨宮勘解由伝説、大善寺伝説があり、すでに昭和37年(1962)に『勝沼町誌』が詳細な検討をしているので、本稿では割愛して、江戸時代のブドウ畑の様子を数少ない史料から垣間見てみよう。雨宮勘解由伝説では、慶長6年(1601)の家康検地で160株、正徳4年(1714)菱山村2町8反6畝26歩、正徳5年(1715)勝沼村5町4畝16歩、正徳6年(1716)上岩崎村6町2反26歩、下岩崎村6反26歩とある。慶長検地では本数で、正徳検地から反別となっており、ここに大きな転換がある。よって『勝沼古事記』が文禄元年「葡萄壺町八反三畝拾八歩」としているのは後の付会と推定される。

上岩崎村の慶長検地帳は欠本があるが、すでに『町誌』が指摘しているようにブドウに関する記述はなく、統治者にとってことさら税を課すほどの段階にはなかったのかもしれない。

しかしながら、約百年後には急速にブドウ畑が拡大してゆくのである。それは慶長7年(1602)に開設した甲州街道開設が大きく影響している。豪農の屋敷内などにあったブドウが、大消費地江戸と直結したことにより、ブドウ特需が生じたのである。さらに、甲府藩主となった柳沢吉保による將軍家へのブドウの献上が大きく影響したものと思われる。

江戸時代のブドウ畑の景観は元禄6年(1693)の『甲路記』は「蒲萄棚有て 野も山もつゞきたり」とし、文化11年(1814)『甲斐国志』では「遙カニ不二相及ブバート云フニ村(岩崎・勝沼)ハ山続キノ畠上ニ架ヲ並ベ設クル事市中瓦屋ノ隣次セルガ如シ」とあり、山沿いの畑にブドウ棚が連なる様子がうかがえる。この時、ブドウ1本ごとの棚であれば、1畝ないし2畝ごとに棚であったろうか。もちろん竹棚である。日川の河岸段丘崖に繁茂する竹で、さほど太くならないものは竹棚用と推定される。

ところで、『勝沼町誌』に上岩崎村の年代ごとのブドウ畑の反別が示されている。江戸時代を通じて徐々に増加していく傾向が見て取れる。



62,028 は 6 町 2 反 28 歩

2 明治13年(1880)の祝村物産表

この物産表は飯田文彌が昭和35年(1960)に「近世甲州葡萄の生産構造と流通(下)」にまとめたもので、最近では『近世甲斐産業経済史の研究』(1982)に収録され、一般にも読みやすくなった。

明治13年(1880)といえば、高野正誠・土屋助次郎がフランスから帰り、本格的ワインを2回目に醸造した年であり、赤ワインの原料となる西洋種のブドウもようやく実った年である。ブドウは10%以下の金額であるのに比べ、繭、生糸、蚕種、桑葉はほぼ80%近い数値を示している。ほとんど養蚕地帯の産業構造である。

旧勝沼町の製糸場はほとんどが祝村に集中するが、明治13年(1880)には8軒の製糸場があり、女工221人を数えた。余談だが、ワイナリーの集中と製糸場の集中が相似的に思えるのは穿ったみかたかもしれない。

明治13年東八代郡祝村物産表

普通物産	種類	数量(石)	金額(円)	金額割合(%)
	米	830.0	8,300.0	7.4
	粟	2.2	22.0	0.0
	大豆	62.0	620.0	0.6
	蕎麦	37.0	240.5	0.2
	蜀黍	240.0	1,800.0	1.6
	玉蜀黍	8.8	44.0	0.0
	大麦	870.0	5,655.0	5.1
	小麦	330.0	3,135.0	2.8
	糯米	68.0	850.0	0.8
	計	2,448.0	20,666.5	18.5
特有物産	種類	数量(斤)	金額(円)	金額割合(%)
	実綿	1,200.0	87.6	0.1
	繭	24,500.0	33,125.0	29.6
	生糸	6,120.0	44,676.0	40.0
	藍葉	3,125.0	156.0	0.1
	葡萄	180,000.0	10,800.0	9.7
	蚕種	200枚	140.0	0.1
	桑葉	42,000.0	2,100.0	1.9
	計		91,084.6	81.5
	合計		111,751.1	100.0

資料：飯田文弥『近世甲斐産業経済史の研究』国書刊行会、1982、204頁より作成。

湯澤規子, 2013

3 連なるブドウ棚の景観

明治10年(1877)10月10日、大日本山梨葡萄酒会社の高野正誠と土屋助次郎は、フランスにブドウ栽培とワイン醸造の伝習のため旅立つ。明治11年(1878)5月10日、同葡萄酒会社中一同はフランスにいる2人に対して10項目にわたるブドウ栽培に関する質問状を送る。片道2ヶ月以上もかかる郵便船を介しての通信とはいえ、まさにリアルタイムにフランスと祝村間で交信して栽培技術の獲得を図っていたのである。

また、明治11年(1878)7月13日の高野・土屋あての仮社長の内田作右衛門・雨宮彦兵衛の手紙では、「本年当村ニテ出来ノ苗者式万斗出来」とあり、地元では2万本の苗を用意していたのである。また同年会社は津田仙の東京学農社から西洋種葡萄苗を購入しているが、本数は明らかでない。株主の1人、高野積成も勸農局からアジロンダック、コンコード、イザベラ、ハースホードを導入している。

山梨県は明治9年(1876)に甲府城跡に勸業試験場を設置し、城跡全体を果樹園にしており、内務省引継絵図によれば和葡萄(甲州種)226本、西洋種10,294本を植えている。また、明治12年に、東京葡萄酒会社(仮称)が45,000本余りの米国産葡萄苗を用意しており、山梨分社の圃場にどの程度配布されたかは不明ではあるが、この時期、全県的にブドウ栽培の気運が高まっていったのである。

現在、調査中の文化的景観対象範囲の中のブドウ畑は、この明治11年(1878)を起点として展開したものといえる。ここから桑園の中に点在していたようなブドウ棚から、地域全体がブドウ棚に覆われる景観に移り変わっていったのであろう。

勝沼における民家について

小林 直弘

工学院大学建築学部

日本の民家について

民家とは一般民衆の住居をさし、町家と農家に建築学や民俗学では分類される。したがって、住空間は住民の様相により変化し、生業をおこないながら住まういわゆる職住一体型の居住空間をいう。また、住空間の必要性は身の安全であり、雨風を防ぐこともあるが、害虫や猛獣から身を守ること大きな役割であった。

我が国の民家の萌芽は先史時代の居住空間に由来し、横穴式住居や竪穴式住居などがそれに該当する。登呂遺跡などで推定復原がなされたもので、円形に掘り下げた土間を植物性の樹木や枝葉、もしくは茅などで覆ったものとされる。竪穴式住居は、「家屋文鏡」を基に考察され、復原がなされている。そのため、我が国の初期の住居は判然としなく、現存する最古の民家建築は兵庫県に2棟あり、ともに重要文化財に指定されている箱木家住宅と古井家住宅とされ、室町時代中後期の建物である。

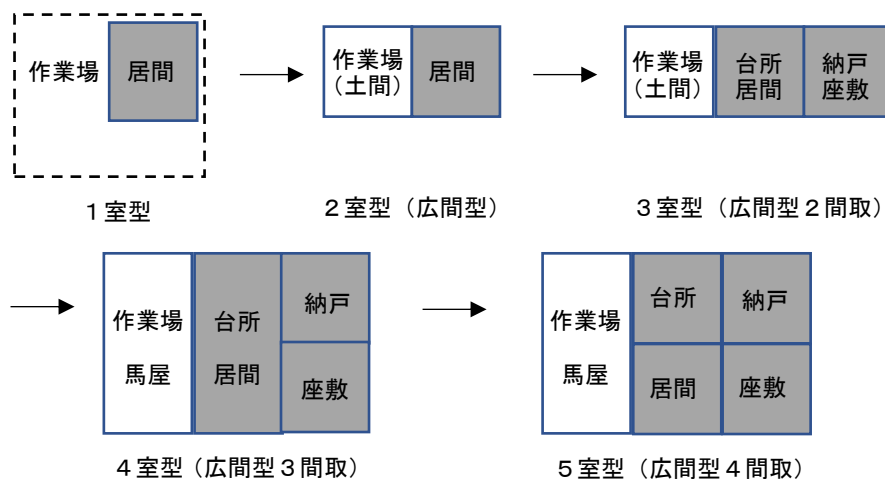
したがって、その間の民家がどのようなものであったかは絵画資料で見ることとなる。

『信貴山縁起絵巻』に描かれた町家、『一遍上人絵伝』や『洛中洛外図屏風』などに掲載される屋根が切妻で、大きさは定かではないが簡素なものであったことが想像される。そのため、先に挙げた箱木家や古井家などはその中でも上級な民家であったことは注意したい。

では、民家の変遷を建築史学の先達の研究成果を基に一般論として概観したい。まず、竪穴式住居などにみられる住空間が、1室としておおわれているものが原初的なもので、これを1室型と呼びたい。この1室型の場合、材料の制限もあることからあまり大型なものは上流階級や集会所などに限られ、一般民衆は小ぶりなもので生活をしていた。そのため、作業をおこなう空間として外部空間も用いたと想像される。

その後、木材など建築材料の加工道具の性能が向上し、一般民衆にも作業空間とともに寝る空間、食べる空間が備わった広間型（2室）が登場する。これらは土座の空間も含み、ムシロなどを敷き、空間を分断したものである。その後は、土間と床上空間を併存させる形で類型化が進み、土間に接する広間にもう1室設けた3室型、奥の1室を2室に分けた広間型3間取り、土間に接する広間を2つに分けた成型4間取りと細分化が進むこととなる。

以上、民家の間取りの変遷を駆け足で見たが、居住空間の拡大と作業場の取りが大きな鍵となることがいえる。



勝沼の民家について

勝沼の民家は、広間型 3 間取りを基礎として広間部分を土間側に伸ばし作業室を縮小させ、床上部の充実を図ることとなる。これは、勝沼の生業の変化を見ると納得がゆく。当初は米作を中心とした全国で普及した広間型 3 間取りを取っていたが、養蚕の全国的な拡大により、室内空間での床上部での作業場の確保が必要となった。そのため、広間の分割や土間部の床上がおこなわれることとなる。

その後、産業の拡大によりより大きな民家をもつことができることから、5 室型の展開として、床上部を 6 室とる 6 間取の民家へと変遷をとげる。

このように一般的な流れをくむ勝沼の民家ではあるが、民家の形を変化させつつも、生業の変化に臨機応変に対応し現代に伝えることは、建築史学上はもちろんのこと民俗学的にも興味深いことが判明した。

以下、上田の修士論文梗概により詳しく見てみる。

甲州市勝沼町の集落形成に関する研究

上田 あゆみ

工学院大学大学院工学研究科建築学専攻2年

1 概要

工学院大学後藤研究室では、甲州市勝沼町の文化的景観の保存活用の一環として、平成29年度より3年間にわたり町内の歴史的建造物についての悉皆調査及び実測調査をおこなった。そこで、甲州街道勝沼宿の主屋には、町家型と農家型の平面形式が混在していることが明らかになった。本稿では、中世から近代にかけての集落形成の変遷を追うことで、甲州街道勝沼宿の民家の特徴を明らかにすることを目的とする。なお、研究対象範囲は甲州市勝沼町の範囲とする。

2 先行研究と本研究の位置づけ

①『甲州街道勝沼宿保存対策調査概要』(1993)

甲州街道勝沼宿及び等々力村の歴史的建造物の保存状況などを把握するとともに、これらの環境の保存対策の検討を目的として設立された「甲州街道勝沼宿伝統的建造物保存対策調査委員会」による調査資料である。調査内容は、歴史的建造物及び社寺建築、石造物の分布調査、実測調査、資料調査である。本稿では、経年による変化がみられる部分の再調査と追加調査をおこなった。

②上田あゆみ『甲州街道勝沼宿の民家の変遷に関する研究－近代以降の発展を中心として－』(2017)

③甲州市教育委員会『勝沼のブドウ畑とワイナリー群の文化的景観中間報告書』(2019)

②は上田あゆみ、③は工学院大学後藤研究室の研究であり、一部その稿を引用する。本稿は、先行研究の結果を踏まえながら考察していく。

3 山梨県甲州市勝沼町について

(1) 勝沼町の概要

勝沼町は、山梨県中央部、甲府盆地の東南端に位置する。総面積は32,238 km²、その45%は山野、35%が傾斜地、20%が平坦地であり、東西9.5km、南北7.9kmである。勝沼町の地形を大別すると、東部及び南東部の山岳地帯と、日川、鬢櫛川、田草川、重川などの河川によってつくられた複合扇状地とに分けることができ、標高は最低が海拔330mから、最高1,412mに分布している。町の東部では、山地が連なって大きな尾根が走り、険しい地形を形成している。一方、平地は日川扇状地、京戸川扇状地、大滝川扇状地で構成され、菱山地区から柏尾に至る山地のすそ野は急傾斜地になっているが、その他は盆地の中心部に向けてなだらかに傾斜している。勝沼宿の一带は、日川の北側に沿っており、標高は地区の東端で

約 477m、西端で 350m、高低差 127m、平均勾配 3,7%となっている。

（２）勝沼町の歴史

中世以前は、勝沼町及びその周辺は武田一族の支配下であり、その居館跡が残されている。武田氏の敗亡以降は、支配体制の移り変わりの中で、勝沼町の村落構成が形つくられた。

近世に入ると、元和 4 年（1618）に甲州街道の新規宿駅として勝沼宿が誕生した。『甲州道中宿村大概帳』（1843）には、甲州盆地と江戸の接点として、多くの物資が集散する中心地としてにぎわいをみせていたと記されている。この時代の主な産物は米や麦であった。

近代以降は、明治維新の後、宿駅制度が廃止され、新たに設立された陸運会社や馬車鉄道を受け、



図 1 勝沼町旧村配置

より活性化した交通便は更なる経済活動を促した。大正 2 年（1913）、勝沼駅（現在の勝沼ぶどう郷駅）が設置され、それまで人や馬によって輸送されていた作物が大量に運ばれるようになり、農業への転換も多くみられ、養蚕や畑作の増加が著しくみられた。また近代化に伴い、ワイン醸造用としてのブドウの需要増大、また戦時中はワインやブドウの葉から抽出される酒石酸が潜水艦の水中聴音機に利用できることから増産された。戦後も高度経済成長期に果実の需要が増大したことから、ブドウの栽培面積は伸び続け、現在でも有数のブドウ産地として有名である。

明治 8 年（1875）から昭和 29 年（1954）にかけて 10 ヲ村が合併し、現在の勝沼町になった。旧村の配置は図 1 の通りである。

4 街道による屋敷構えの影響

（１）勝沼町の主要な街道

甲州市には古道が存在し、そのうち勝沼には鎌倉道とその支道、甲州街道が通る。各々の街区構成を以下に述べる。

勝沼の街区形成をみていくと、中世に河岸段丘上の盆地方向を俯瞰できる位置に勝沼氏館が立てられ、その後、近世には段丘上の尾根筋を甲州街道が通り、勝沼宿ができる。街路は等高線に直行する形で形成され、館を中心に同心円状の地割がされている。これは、鎌倉道や小佐手小路などに見られ、東西方向の傾斜を意識した街路形成がされているのがわかる。対して、甲州街道は中世の街区形成とは異なり、河岸段丘などの南北方向の起伏や傾斜を意識したものであると考えられる。



図2 勝沼町標高図と街道の分布

(2) 岩崎地域の街区構成

勝沼町南部にある岩崎地域では、明治時代頃まで日川下の旧道である鎌倉道とその支道が主要な道であった。鎌倉道の支道である旧道沿いには、多くの寺院が立地し、道祖神や馬頭観音が見られる。形状は、直線的ではなく、畑地の間を折れ曲がりながら配されている。その後、新道と呼ばれる県道田中勝沼線が幹線となり、その沿道に多くの家屋が並び、戦時まで製糸業に関する多くの工場が並んだ。



図3 岩崎地域の街道

5 勝沼町の主屋配置

(1) 現存する歴史的建造物の分布

先行研究にて歴史的建造物の分布状況について調査されているが、約25年が経ち分布状況に建て替えなどによる変化が見られたため、先行研究③で改めて悉皆調査をおこなった。悉皆調査では、甲州街道沿いに現存する建物の目視調査をおこない、現存する歴史的建造物の分布状況、各建物の推定年代、構造、正面形式、屋根形式、屋根材、屋敷構えなどを記録した。本研究では、41軒追加調査をおこなった。

①H家（甲州街道沿い）

仲町の甲州街道沿い南側に北面し、敷地は短冊形である。屋敷配置は、東から東土蔵、主屋、西店舗と並ぶ。蔵は妻面、主屋と店舗は平面を接道させる。主屋は、木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根である。主屋の平面構成は、正面左（東側）に出入口があり、土間がL字に配されている。出入口から南へ伸びる土間は幅1間半の通り土間で、土間に接して和室2部屋が南へ3列並んでいる。



写真1 外観

②S家（甲州街道沿い）

移築以前は、等々力の甲州街道沿い南側に北面して建ち、敷地は短冊形である。屋敷配置は、東から主屋、土蔵と並ぶ。蔵は妻面、主屋は平面を接道させる。主屋は、木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根で養蚕用の突き出し屋根を設ける。平面構成は、東にある出入口から南に伸びる通り土間があり、部屋は2列に3部屋続く田の字型の形式をとる。



写真2 外観古写真

③E家（小佐手小路沿い）

小佐手小路沿いの西側に東面し、敷地は正方形である。屋敷配置は、主屋を北寄せに接道させ、その南に付属屋が東西に並び、敷地西側にブドウ畑が広がり、川に接する。主屋は木造2階建て平入の切妻造桧瓦葺屋根である。平面構成は、土間があり、部屋は2列に3部屋続く田の字型の形式をとる。



写真3 外観

④U家（県道田中勝沼線沿い）

県道田中勝沼線沿いの南側に北面し、敷地はL字型である。屋敷配置は、主屋を北寄せに接道させ、その南西にブドウ畑が広がり、西側は川に接する。主屋は木造平屋建て平入の切妻造鉄板葺屋根（当初は茅葺）である。主屋の平面構成は、土間があり、部屋は2列に2部屋続く田の字型の形式をとる。



写真4 外観

6 旧村の形成

(1) 史料からよみとく街区形成

①勝沼村

明治14年(1881)6月に描かれた『東山梨郡勝沼村略図』は、勝沼村最古の絵図である。絵図は甲州街道を中心に描かれ、大善寺領、小佐手小道、鎌倉道、家屋の並びが描かれる。家屋について、甲州街道沿いのものは接道して建ち、甲州街道沿いには大善寺から上行寺にかけてはまばらに並び、上行寺から等々力村境にかけては固まって並ぶ。小佐手小道、鎌倉道沿いの家屋は、接道しているものが数か所あるが、多数は接道ではない。

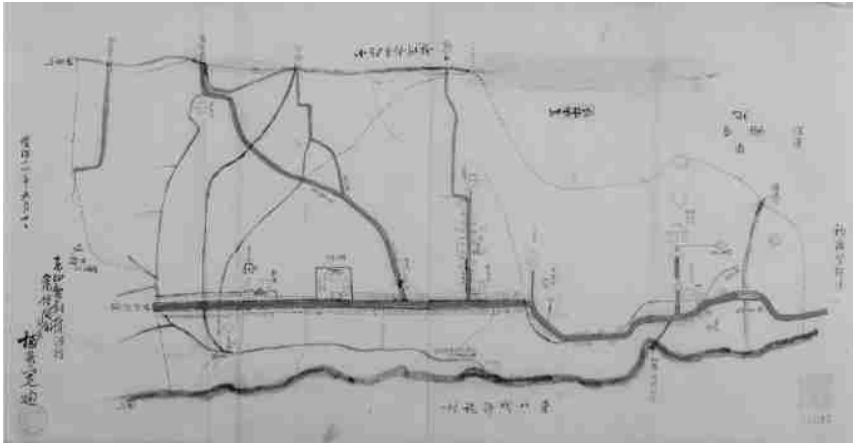


図4 東山梨郡勝沼村略図(甲州市教育委員会所有)

明治10年(1877)に作成された『勝沼宿番順屋敷取調帳』は、勝沼宿の敷地の縦横寸法を記載した台帳である。結果、勝沼町全体としては、梁間が5～10間のものが65%を占める。桁行に関しては、14～16間が22%、21～22間が13%を占め、やや固まっているが、全体的にまばらな分布傾向である。また梁間について地域別に見ると、上町は6～7間が41%、仲町は5～7間が45%、本町は5～8間が54%を占める。富町は6～10間が82%を占め、8間が1番多く34%を占める。堰合町は、8～9間が53%を占める。

明治16年(1883)に作成された『勝沼宿建物取調帳』は、勝沼宿の建物の縦横寸法を記載した台帳である。その中でも建屋という項目に着目すると、全体で240軒あり、梁間は2間が一番多く全体の35%を占めた。また、全体の72%が2～3間であった。桁行は5間が一番多く全体の21%を占め、3～6間が59%を占める。

②綿塚村

宝永4年(1707)に描かれた『綿塚村絵図』は、綿塚村最古の絵図であり、法量は不明である。絵図は南上で描かれ、各戸の家屋と田畑の所有地を中心に描かれている。村には天神社、飯縄神社、大石神社の3社がある。基本的に主屋は東西に妻面を向け、敷地半ばに配置されているが、一部敷地が短冊形で細長い場合は南北に妻面を向ける。また、飯縄神社の参道には、主屋の平面を接道させるものが数軒みられる。

（２）現状からよみとく街区形成

現在の綿塚村は、前述でとりあげた『綿塚村絵図』と比較しても街区形成が当初の形を残している。したがって、勝沼町の近世の姿をよく残している地域として悉皆調査をおこなった。

①〇家（綿塚地区）

飯縄神社の参道の南側に北面して建つ。敷地は正方形である。屋敷配置は、南東に蔵、北側に庭を設ける。主屋は木造平屋建て平入の切妻造鉄板葺屋根（当初は茅葺）である。現在の主屋の平面構成は、土間があり、部屋は２列に２部屋続く田の字型の形式をとる。

ヒアリング調査によると、改修以前は土間の西側は１室、２室と部屋が並んでいた。また、痕跡調査によると、下屋と上屋の通りに柱がないことと、２段梁があることから、江戸後期の竣工であると考えられる。



写真5 外観

7 勝沼町の民家の特徴に関する考察

（１）甲州街道沿いの特徴

敷地の形状は、短冊形と不整形の形が見られた。敷地の使い方は、南北関係なく主屋を接道させて配置させることが多い。また主屋の横に土蔵を接道させる場合もある。

建物の形態は、木造２階建て、平入、切妻造り葺瓦葺きのものが多くみられる。主屋は店舗を兼ねているものも多く、看板建築に改築している例も多くみられる。

平面形式は、平面形式は、主に町家型、農家型の２つに分けられる。町家型は、前土間及び通り土間があり、１室３列の部屋が並ぶ。間口の広さによって、２室が並んだり、通り土間を挟んで部屋が設けられる場合がある。（図４）

町家型は主に富町から東側の地域にみられ、これは間口が狭く奥行が長い地割故だと考えられる。

一方、農家型の平面構成は、入り口奥に土間が通り、田の字型に部屋が配置される。町家型に比べて、比較の間口が広い地割になっている。

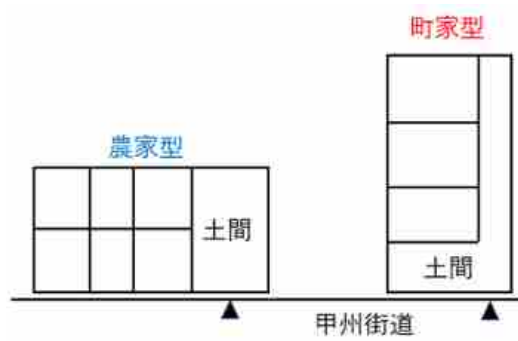


図4 宿場町の平面形式

（２）農村部の民家の特徴

敷地の形状は、ほとんどが不整形の形である。敷地の使い方は、北に主屋を寄せ、南に庭をつくる形が一定して見られ、南側に入り口を設ける。小佐手小路などの南北に延びる道に接する場合、主屋の妻面を接道させることが多い。また、敷地と敷地の間に水路を設ける所が多くみられた。これは、敷地奥に畑地を併設することが多い故と考えられる。

田中勝沼線などの東西に延びる道に接する場合、南側の家は北側に入り口を設ける箇所も数軒みられた。特に、田中勝沼線の東端の民家に多く、これは間口が狭く側面に入口を設けられなかったことに起因すると考えられる。

建物の形態は、切妻造、平入、茅葺が伝統的な形態であったと推測できるが、そこに突き上げ屋根を用いたものが近世以降普及する。

また、群馬式の越屋根を持ち、総２階の切妻造平入の民家もみられる。在来工法による複合屋根で一部２階建ての建物も存在し、種別は多様である。

平面形式は、入り口奥に土間が通り、田の字型に部屋が配置される。現在大半が４、６部屋有するものが多いが、もともとは３部屋だったものもあり、改築を経て変化していったものと考えられる。

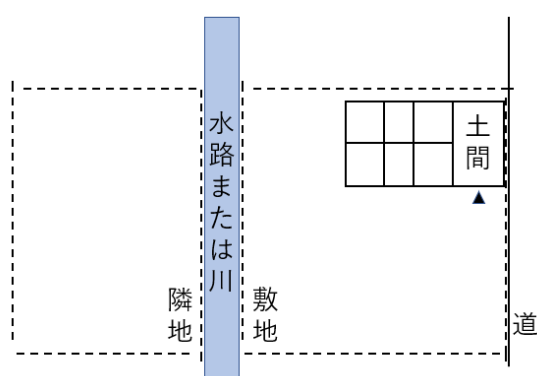


図５ 宿場町の平面形式

（３）宿場町の民家と農村部の民家の相違

敷地について、甲州街道沿いを見ると、上町東端や堰合から西側は農村部のような規模の不整形の敷地が多く見られる。しかし、主屋の配置については、建物を甲州街道に接道させる。

建物の形態に関しては、甲州街道沿いでは平面形式が農家型でも町家の立面をもつ。以上のことより、甲州街道沿いの民家は、町家の街並みの影響を強く受けていることがうかがえる。また、平面形式について、勝沼町では木造平屋建て切妻造り茅葺の民家が祖型としてみられる。そして、甲州街道沿いの農家型と農村部の間取りが類似していることから、甲州街道沿いでも職種が農家の場合は、もともと勝沼町で根付いた平面形式を引き継いだと考えられる。

８ おわりに

勝沼町の民家は、甲州街道沿い与其他農村部で街並みが異なる。農村部は、木造平屋建て、切妻造り茅葺、３間取りの形式を祖型とする。時代を経て、部屋数が４または６部屋に増える。これは山梨県の多くの民家の変遷と同じである。甲州街道沿いの民家は、木造２階建て、切妻造り棧瓦葺きで、主屋を接道させる町家の街並みをもつ。平面形式は、町家型と

農家型のものが混在しており、農家型のものは、農村部のものと類似する。

したがって勝沼町では、甲州街道の宿場町としての価値が表立っていたが、そこには中世以前の街並みの名残が混在している。

参考文献

- 1) 勝沼町役場『勝沼町誌』（昭和 37 年 5 月）
- 2) 山梨県教育委員会『山梨県の民家』（昭和 57 年 3 月）
- 3) 渡辺洋子、伊藤裕久『旧甲州街道台ヶ原宿の町並と住居形式に関する研究』（平成 13 年度）
- 4) 山梨県教育委員会「山梨県史」（平成 19 年度）

学校教育における地域学習の現状と課題及びその効果的手法に関する試論 -地域資源継承のための方策として-

岩田 美耶

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

第1章 研究の背景

1980年代以降、少子化の進行に伴い若年層の人口が減少していることから、日本各地で高齢化が課題となっている。特に、農山村地域においては深刻である。そうしたことに起因する地域の人口減少と過疎化の進行は、社会的基盤の維持を困難にし、地域の衰退に拍車をかける。

こうした中で、農山村における環境保全、関係人口及び交流人口の増加に向けた取り組みが官民いずれにおいてもさまざまになされており、そうした取り組みでは農山村の魅力を発信するための地域資源の活用も重視されている。

また、核家族化や人口減少の進行によって、高齢者と次世代を担う若者の触れ合う機会が減少傾向にある。それは、農山村地域における地域資源の継承を困難とする一因ともなっている。それは、地域に対する理解や愛着、誇りの喪失をもたらし、結果的に農山村地域における人口流出、地域の衰退・消滅などの進行にも繋がる要因にもなりうる。

こうした事態を防ぐためには、地域資源の活用だけではなく、その前提として地域の中で資源を共有し、継承する取り組みも重要であり、そのための手段として学校教育における地域学習が注目されている。現在、義務教育の教育カリキュラムとしては、小学3・4学年の社会科において地域学習が扱われており、地域が直面する課題の解決や地域活性化のための学習などをおこなっている。

そして、こうした地域学習に関する授業で使用する「教材」としては、教科書に加え、市町村ごとに刊行されている社会科副読本が用いられていることが多いが、副読本の発行主体である市町村の合併が進行していることに伴い、社会科副読本の対象が広域化している。

こうした中で、当該地域の地域資源及び独自性の継承に貢献しうるものとして学校教育における地域学習に関する新たな知見について検討することは意義がある。

また、先行研究においても、市町村合併に伴う小学校社会科副読本をめぐる課題に関する研究などはなされているが、あくまで課題の分析にとどまっており、副読本という教材と「作業的、体験的な学習」（注1）という授業実践の連携という観点から、地域学習の現状と課題、効果的な手法などを検討する研究は今までに十分になされているとはいえず、その進展は学術的にも一定の意義が認められる。

第2章 研究の目的・方法

現代社会において、農山村の地域社会を持続させるためには、地域が受け継いできた資源・文化の共有及び継承も重要である。そのためには、前述のとおり学校教育が果たす役割も大きく、児童が地域資源（注2）に対する理解を深めるとともに、地域の歴史的な背景を反映している資源や特徴（本論文では、以下「地域の独自性」とする）の継承を可能にするような教育カリキュラムが展開されることが望まれる。

そこで、本研究では、農山村地域における地域資源及び「地域の独自性」の継承に着目し、学校教育を通じた地域学習の現状と課題及び効果的な実践方法の在り方について、「教材」及び「作業的、体験的な学習」（授業実践）という2つの観点からの検討を通じて明らかにする。

「教材」の検討では、山梨県内において刊行された各市町村の社会科副読本を対象とし、その内容の比較分析に基づき、地域学習教材としての副読本の現状と課題について明らかにすることを目的とする。

また、「作業的、体験的な学習」の検討では、小学校における地域探検の実践と、そこで得られたデータに基づき、児童の地域に対する理解の向上や地域への愛着・誇りの醸成に対する効果及び地域独自の資源を保護・継承する意識に対する効果を明らかにすることを目的とする。

第3章 山梨県社会科副読本の分析を通じた地域学習の現状と課題

1 研究の目的

本章では、学校教育での地域学習における「教材」のひとつである社会科副読本の役割及び問題点を明らかにするため、その内容について、空間軸、時間軸という視点から分析をおこなう。

空間軸とはある一定の時期に刊行された複数の市町村の副読本の内容を比較分析することであり、それを通じて、市町村に共通して見られる副読本全般の現状と課題について明らかにする。

また、時間軸とは副読本の改訂履歴の中でその内容の変遷を検討することであり、特に市町村合併によって生じる副読本の内容の変化とそこにみられる地域課題における諸課題を検討する。

2 社会科副読本の内容に関する分析（空間軸）

（1）分析対象と方法

山梨県内の市町村のうち、2019年までに副読本を発行したことがあるのは24市町村である。そのうち、2000年以前に発行されたものは、児童と地域との関わりが現在と異なっている場合があるため、それ以降に副読本を発行された21市町村20冊（注3）の最新の副読本を対象とし、それらの掲載内容について分析することを主たる目的とするため、これらが

現在の授業において継続して使用されているか否かは分析対象資料の前提としていない。

（２）社会科副読本の現状と課題

多くの副読本では、扱われている項目が「市町村の様子」、「歴史」、「生活」の３つの内容に大別されるため、これらの項目ごとに、多くの副読本に共通する内容と市町村ごとに記述の有無や内容が異なる事項について分析する。

副読本の内容は、施設や地形などの地域で生活していくうえで重要になるものや、祭りや行事、伝統文化などの今でも受け継がれているものを中心的に取り上げており、副読本は地域の歴史的な背景を学ぶよりも、生活する術を学ぶことを重視しているといえる。地域で生活していくうえで不可欠な事項の学びを目的とする副読本での学習は、地区単位の地域に対する知識や理解が十分ではない。また、市町村合併により副読本の対象地域が広域化すると、学習内容と日常生活の繋がりが希薄になり、より一層地域への理解が困難になる。

加えて、市町村の各地区単位での地域資源についての記載がほとんどないため、副読本での学習は「地域の独自性」を学ぶ機会が少ないといえ、地域に対する興味が欠落すると考えられる。

したがって、「地域の独自性」について学習するうえで、現在の地域学習では地域の歴史を将来に継承することは困難であり、市町村合併が進むことによって地域独自の歴史は失われるといえる。

副読本における「作業的、体験的な学習」では、フィールドワークである地域探検がもっとも多く、８市町村で取り上げられていた。しかし、地域への愛着や誇りの醸成に効果的である児童の主観性を伸ばすことを目的としているのは、そのうちの３市町村のみであった。そのため、現在おこなわれているような地域探検では地域資源の継承に結びつかないことが懸念される。地域に対する愛着を向上させ、「地域の独自性」を継承するためには、児童が日頃から見ているような、「地域の独自性」をもつ資源について学習する機会を設けることが重要だと考えられる。

３ 市町村合併前後の副読本の内容変化における比較分析（時間軸）

（１）分析対象と方法

社会科副読本の内容について、市町村合併による行政区域拡大の影響を考察するため、２において分析対象とした市町村のうち、愛着や誇りの醸成に効果的な、児童の主観性を伸ばすことを目的とした地域学習をおこなっているという観点から、その分析に有効であると判断した現在の山梨県甲州市及び平成の合併以前の３市町村（旧塩山市、旧勝沼町、旧大和村）における副読本を対象とした。合併前の３市町村のうち、面積、人口ともにもっとも規模が大きい自治体は旧塩山市である。甲州市の最新の副読本と、旧塩山市、旧勝沼町、旧大和村において刊行された８冊の社会科副読本を分析対象とし、「地域の独自性」

に関する記載の比較分析をおこなう。

（２）分析と考察

旧塩山市、旧大和村の副読本は、地域の特徴や歴史的背景を学ぶよりも、暮らすうえで重要となる安全、健康などに関する内容を中心としている点で、現在の甲州市の副読本における内容と類似していることがわかった。

特に、旧塩山市の副読本は、現在の甲州市の副読本と記載に大きな違いが認められなかったため、合併対象となる地域の中でもっとも規模が大きい旧塩山市で刊行された副読本の影響を強く受けて、合併後の副読本が作成されていることが明らかとなった。

一方で、旧勝沼町の副読本は、仕事の項目だけでなく、暮らしの移り変わり、暮らしの発展などにおける項目において、ブドウ栽培に関する記載が多数見られた。旧勝沼町の副読本は、地域の基幹産業となっているブドウ栽培を軸として、地域の発展や移り変わりについて記載されていることがわかる。したがって、甲州市における合併後の旧市町村の社会科副読本において、地域の特徴を反映した内容を学ぶことを目的とした場合、もっとも有効なのは旧勝沼町であると考えられる。

また、甲州市合併後の副読本には、旧勝沼町時代に多く記述されていたブドウ栽培に関する記述は仕事の項目のみとなり、地域の中心となっていた産業に関する記述が減少したことが明らかになった。市町村合併による行政区域の拡大の影響を受けて、社会科副読本という教材レベルで見た場合にも、地域の特徴を学ぶ機会が減少していることが指摘できる。

分析をおこなった市町村合併前の副読本の多くで、地域の歴史が学習できるような「むかしのようす」などの項目を設けている副読本があったため、合併前に記載されていたより細分化された地域単位での独自性に関する記述は減少している。

４ 考察

副読本の内容分析により、市町村合併が進むにつれて、地域学習の内容と日常生活が結びつかない場合があることが明らかになった。また、社会科副読本に身近な地域に関する記述が少なくなることで、教育内容とその効果という面でも「地域の独自性」に対する理解や愛着が低下し、「地域の独自性」が失われる可能性が指摘できる。こうした可能性を低減し、「地域の独自性」を継承するために有効的な地域学習をおこなううえで効果的な方策のひとつとして小学校付近などの身近な地域を歩く地域探検があげられる。

第4章 小学校における地域探検などの実践を通じた効果的な地域学習手法

1 研究の目的と研究方法・対象

本章は、地域探検及びそれに関する取り組みにおける、児童の地域に対する理解の向上と地域への愛着の醸成に関する効果を考察することを目的とする。そのため、小学校の教育現場において、地域探検、企画展、地域探検まとめ授業の3段階の実践と評価を通じたアクションリサーチをおこなう。これらを通じて、児童の地域への理解・関心を向上させるための有効な教育手法について考察するとともに、それが地域への愛着の醸成及び地域の独自性の継承に資する可能性について提起する。

山梨県甲州市勝沼町にある甲州市立勝沼小学校、祝小学校、東雲小学校、菱山小学校の3年生を対象に取り組みをおこない、その成果に基づき検討をおこなった。なお、小学3年生は、学習指導要領において「身近な地域や市区町村の地理的環境」と「地域の様子の移り変わり」（文部科学省，2018，p. 32）について学習することが定められ、地域理解のための内容が扱われる年次に該当する。

2 地域探検

児童にデジタルカメラを配布し、地域探検の中で興味をもったものや気になったものを撮影させた。探検の途中で立ち止まるポイントを設け、書籍や道具を用いて身近にある地域資源について解説した。散策後に、児童に被写体の好き嫌いと撮影理由を記入するシートを配布し、記述させた。

地域探検で撮影された被写体を分析すると、児童はブドウやワイン関係の資源、各地域のみにしかない施設、勝沼地域に共通している資源といった面において新たに関心を示したことがわかる。その点で、地域探検は、地域に関する幅広い分野における関心を向上させるうえで効果的だといえる。また、被写体の撮影理由において、地域探検中にした説明が引用されているものも多く見られたため、地域探検は地域に対する理解を深めることを可能にするといえる。

地域探検を経て、今までは「ただ見たことがある」という段階であった「日常生活にあるよくわからなかったもの」を児童が自分の言葉で説明できるきっかけとなり、地域への理解が深まったと考えられる。勝沼町の各地区独自の施設や資源、あるいは勝沼町全体に共通する資源に目を向け、児童のもつ勝沼町に対するアイデンティティがより幅広く明確になったといえる。

3 企画展

地域探検の成果を大人と共有するために、企画展「勝沼の時代（とき）を写す。」を開催した。展示場所は勝沼町内にある宮光園白蔵、ぶどうの丘、勝沼図書館などの文化・観光施設である。

ここでは、地域探検の成果を共有するために、小学生が撮影した写真とその撮影理由を

まとめ、学校ごとに写真の傾向を分析し記述したパネルを作成した。企画展では来場者に「小学生が撮影した写真の中で1番好きなもの」、「勝沼の印象」などについてのアンケートを実施した。

企画展来場者が地域探検の成果パネルを見て、「知らなかった、行ってみたい」とアンケートで回答している資源は、児童が地域探検まとめ授業で「観光客に紹介したいもの」として多くの回答があった資源と共通していた。このことから、勝沼地域の児童が勝沼地域で誇りや愛着を感じている資源に、大人も魅力を感じているといえる。地域探検の成果を共有することは、大人にも知られていない勝沼の魅力を児童の目線から感じることができ、新たな勝沼の一面を発見することを可能にする。そして地域探検で児童が撮影した写真を共有することは、観光客がいわゆる観光施設だけではなく勝沼の生活や生業に興味を持ち、地域内を散策したいと感じさせるきっかけづくりとして役割を果たしている。

また、来場者アンケートの「勝沼への印象」については、ブドウ関係の資源や自然に関する回答が高い割合を占めた。その一方で、勝沼地域の児童にとって「ブドウ畑は勝沼らしい」という認識は高くないということが地域探検まとめ授業の成果から指摘できる。道端にあるようなマンホール、道祖神、地蔵などの普段見ている景色に溶け込んでいるものを、勝沼地域の共通認識として捉えていることが明らかになった（4参照）。

児童から見た、ブドウを中心としない勝沼地域の景観を大人と共有することによって、大人が違った面から勝沼を見つめることが可能となった。地域探検の成果を共有する企画展は、大人がもつ勝沼に対するアイデンティティの幅を広げることに効果的である。

4 地域探検まとめ授業

地域探検のまとめとして4小学校3年生に授業をおこなった。授業は地域探検の振り返り、企画展での大人からの感想コメントの発表、自分の地域資源の再確認、他の地域における代表的な資源に関する学習の順に進めていき、これらをもとに自分の地域と他の地域にある資源の相違点を見つけ、発見シートに記述させた。挙げられた相違点をもとに自らの地域についての学びを深め、地域に対する理解を向上させた。最後に授業のまとめとして、「観光客に紹介したいもの」、「地域探検の感想」を感想シートに記述させた。

勝沼地域に共通するものとして、農村地域ならではの資源が多く回答される中、農村資源の外見の違いに注目し、違うものとしても多くの回答が見られた。このことから児童は日常的に身近に感じるものに興味・関心を示していると考えられる。地域探検まとめ授業は、同じ地域資源でも外見の違いから、自らの地域の独自の特徴を理解することを可能にするといえる。

「観光客に紹介したいもの」として児童が回答した資源の中には、自分の地区ではなく、比較した他の地区の地域資源を回答も見られたため、他の地区にはその地区の良さがあることを理解しているといえる。

自らの地域だけでなく、他の地域についても学ぶことで、自らの「地域の独自性」に対する理解がより一層深まったといえる。地域探検まとめ授業は、児童のもつ地域に対するアイデンティティを確立することが可能になる。

第5章 おわりに

以上の分析を踏まえ、社会科副読本の内容を現状のまま維持しつつ「地域の独自性」についての学習を地域探検で補うことで、市内全域の学習と身近な地域に関する学習の両方を満たすことができ、より効果的な地域学習をおこなうことができる。

こうした地域学習を確立することで、児童にとってより身近に感じられる、効果的な地域学習が実現できると考えられる。

注

(1) 地域学習に代表される実際に活動体験を通して学びを深める地理授業のことである(戸井田 2013)。

(2) 本論文では、地域資源として考えられる多様な要素の中でも特に地域の歴史文化的な背景をもつ資源を対象とする。

(3) 市町村数と冊数が一致していないのは、富士河口湖町及び鳴沢村が共同で1冊の副読本を刊行しているためである。

参考文献

戸井田克己(2013)「地理学習の指導法」『人文地理学辞典』丸善出版, pp. 628-629

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』日本文教出版, p. 32

高付加価値の果樹を観光資源とした農村における観光地マネジメント手法の一考察 -山梨県甲州市勝沼地域の来訪者の属性と移動手段の分析を中心に-

高橋 瑞季

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

1 研究の背景と目的

高度経済成長以降、農村から都市部へ人口が流出した結果、農村では地域コミュニティの喪失や弱体化が進行した。そして、現在、地域の維持のため、どのように定住人口や交流人口を増やすかが重大な課題のひとつとなった。そのための取り組みとして、グリーンツーリズムをはじめとする農村での観光地域づくりが地域住民や行政により行われている。

本研究では、「高付加価値の果樹」を観光資源とした農村を対象に、その資源の特性を活かして当該地域を観光地としてマネジメントするための手法の一端を明らかにすることを目的とする。ここでいう「高付加価値の果樹」とは、五感に依拠した嗜好品的価値やその高額な流通価格を前提に、果物狩りなどの体験型の観光と親和性が高い果樹とする。

このような高付加価値の果樹は、観光の動機その他、体験型の観光などの魅力的な観光コンテンツにもなりやすい一方、実際の観光では、主たる観光行動は果樹の購入にとどまり、地域内の回遊性を高め、当該地域の多様な魅力を五感に働きかけるような仕組み、求められる条件などが十分に確立されているとはいえない。

こうした課題の一端を検討するため、本研究では、高付加価値の果樹を観光資源とした農村において、来訪者の食生活や属性、観光行動から実態と課題を分析・把握する。加えて、域内における自動車以外の移動手段としてのレンタサイクルについて、現状の行動特性の分析に基づき、移動手段としての可能性と現状の課題について把握する(図1)。

こうした分析を通じて、高付加価値の果樹を観光資源とする地域における、来訪者の特性と地域の多様な魅力の発信を前提とした観光地マネジメント手法について、特に域内交通という観点を中心に考察する。

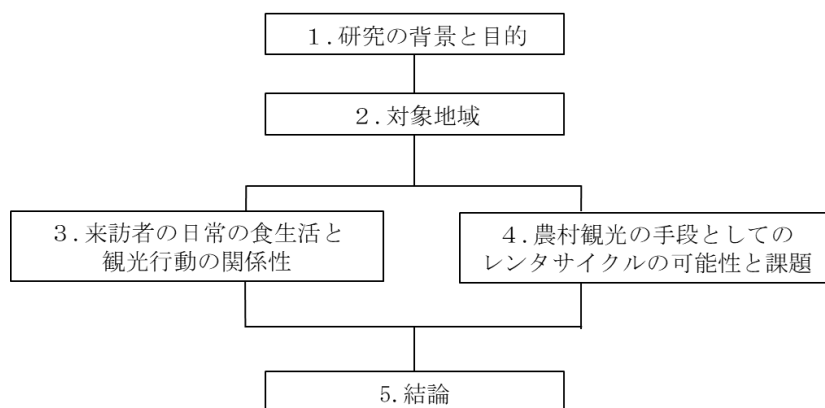


図1 研究のフロー (筆者作成)

2 対象地域

本研究では、高付加価値の果樹を観光資源とする典型的な農村地域である山梨県甲州市勝沼地域を対象とする。当該地域はブドウ栽培やワイン醸造を主たる産業とし、ブドウやワインを主要な観光資源とし、特に戦後にはそれらを活かした観光地として発展してきた。地域全体にブドウ畑が広がり、観光ブドウ園やワイナリーが数多く立地する。また、地域内に高速道路や鉄道が通っていることからアクセスがよい。他方、入込観光客数は、ブドウの収穫シーズンである8月～10月頃とそれ以外の時期で大きな差が生じ、生産性や雇用の面からの課題もある。

3 来訪者の日常の食生活と観光行動の関係性

(1) 本章の目的

日常の食生活の嗜好が観光動機と大きく関係することを踏まえ、日常の食生活と観光動機の関係性を明らかにするため、来訪者へのアンケート調査に基づき、当該地域の来訪者の日常の食生活や飲酒、現地での観光行動を把握する。そして、調査結果に基づき、高付加価値の果樹を観光資源とする農村の現状と課題を考察する。

(2) アンケート調査の概要

調査は、勝沼地域の観光シーズン最盛期である9月4日間（祝・休日）に、観光施設「かつぬまぶどうの丘」（以下、ぶどうの丘とする）にて実施した。調査は調査員による配布後、自記式で行い、回収数は355枚、うち有効回答数は352枚だった。

質問内容は、①ブドウ及びワインの日常的な摂取に関する設問、②勝沼を訪れた来訪目的に関する設問、③交通手段や観光ルートといった当日の観光行動に関する設問をそれぞれ設定し、それに来訪者の属性に関する設問を加えて構成される。

(3) 調査結果の分析と考察

日常的な食生活においては、ブドウを「シーズンに1回程度」の摂取とする回答がもっとも多く、日常的に摂取する傾向は見られなかった。リピーター層ほど、市場における流通の少ないブドウ品種までを認識しており、来訪頻度がブドウに対する知識に影響を与えていることがわかった。

また、勝沼地域の来訪者においてアルコールの愛飲者が顕著に多いわけではないが、ワインに関しては日常的に飲むアルコールの種類としては高い割合を占める。ただし、ワインの産地に関するこだわりをもった層が多いわけではないことから、日常的にワインを飲むが、ワインに関して特にこだわりの強い層ではないことが考えられる。

観光行動では、「ブドウ狩り」については顕著な差は見られない。また、リピーター層では、高付加価値の産品であるブドウやワインについて産地で購入するということが来訪の動機として働いていることが考えられる。前述の通り、市場流通が少ないブドウ品種の認知

がリピーター層で顕著に高いこともそうしたことによるものと推測される。

現地における観光行動については、ぶどうの丘来訪の前後で、観光ブドウ園でのブドウ購入やブドウ狩りを中心におこなうといった行動が多くみられるが、ここで来訪対象となる観光ブドウ園は、ぶどうの丘周辺のものも多く、結果的にぶどうの丘近隣に人が滞留していると考えられる。他方、ぶどうの丘から離れ、ワイナリーを訪れる場合には、単に試飲のみ目的として来訪しているのではなく、ブドウ畑などを展望しながらの食事など、ワインにとどまらない広い目的をもっている。これは、カフェを併設したワイナリーに食事を目的に訪問している層が顕著に見られることから明らかである。

こうした分析を通じて、現在の勝沼地域では、ぶどうの丘近辺や一部のワイナリーなど、一部エリアに集中して人が滞留しており、多様なワイナリー、観光ブドウ園など、地域全域に広がる多様な観光資源をもちながら、自家用車を中心とした移動手段で十分な回遊性が生まれていないことが明らかとなった。

こうした中で、どのようにして地域全体への回遊性を生み出し、景観、あるいは勝沼地域の多様な資源の魅力を認知し、また実際に体験してもらうのが、リピーター層の来訪目的の多角化などにおいても重要な課題といえる。

そうした手法のひとつとして、移動手段の多角化が考えられる。アンケート調査の結果から、勝沼地域を来訪する観光客の半数程度が自動車、3割強が電車によって訪れている。自動車で訪れた場合、その多くは域内でも自動車を使って駐車場を併設した場所を点と点を結ぶように観光をする。それ故、行動範囲は制限がかかり、また、点と点の間は深く観察する時間もなく過ぎてしまう。電車の場合も、域内を移動するバスは本数が極めて少なく、観光客向けの移動手段として効果的に機能していない。また、バス停・運行ルートの制約から、徒歩移動を避けた場合、来訪できる場所にも制限がかかる。

こうした中で、地域の産品であるブドウ・ワインの購入を超えて、地域の魅力に対する理解を促すため、面として地域を体験できるような効果的な域内交通手段が求められている。

4 農村観光の手段としてのレンタサイクルの可能性と課題

(1) 本章の目的と分析方法

レンタサイクルに代表される自動車以外の域内交通手段は、地域の魅力を積極的に発信し、観光対象を点から面へと展開するための仕掛けのひとつとして有効である。そのため、本章では新たな域内交通手段の可能性と課題を明らかにし、効果的な域内交通手段の在り方を考察するため、現在、甲州市によって運用されているレンタサイクルシステム「ぐるりん」について、利用時に得られた移動軌跡データ（GPS 座標など）から観光客の行動特性を分析する。

甲州市によって事業化されているレンタサイクル「ぐるりん」において、利用時に取得され、管理者のサーバーに保存された移動軌跡データ（GPS 座標など）から、時期ごとの利用台数などの変動について把握するとともに、GIS ソフトウェア（ESRI ArcGIS Pro）を用い

て、ポイントの集積分布を計算するカーネル密度解析と、ポイント間を結ぶラインの密度を計測する線密度解析の2つの手法を用いて解析を行い、その結果を分析する。

（２）年間のレンタサイクルの利用実態

もっとも稼働していた時期は8月～11月であり、勝沼地域の観光の繁忙期にあたる。また、12月に入ると繁忙期の半分以下の台数に減少する。こうしたデータを勝沼地域の観光動向と対応させた場合、8月は夏休みのため家族連れの観光客の増加、9月・10月・11月はブドウの収穫シーズンによるブドウ狩り需要やワインの新酒需要などによりブドウやワインを求める観光客の増加と対応するものと推測される。また、3月や4月も稼働台数は多いが、これは勝沼ぶどう郷駅を起点とした塩山方面への花見の需要が高まるためと考えられる。

また、日別では休日の稼働が多い傾向がある。特に繁忙期は平日との稼働台数の差が著しい。

（３）レンタサイクル利用者の行動特性

レンタサイクルを利用した観光行動は、1年を通して、ぶどうの丘のみでなく、勝沼地域全域に移動が見られることがデータより明らかとなった(図a～図f)。訪問先については、繁忙期に特定の場所に人が集中している。例えば、観光ブドウ園は8月・9月の収穫シーズン、ハーブ庭園は8～10月に集中している。ワイナリーの訪問は年間を通じて集中が見られ、特に原茂ワインの訪問率は高い。他方、繁忙期以外では特定の訪問先に限定しないかたちで多様な場所に訪れている。

繁忙期においても観光ブドウ園やワイナリーへの移動は多いが、結局は前述のような観光スポットを点と点を結ぶような移動が行われており、利用者の移動ルートが画一化されていることが指摘される。また、裏道（農道）などを通ることは通年を通して見られ、バスや自家用車などの車を利用した観光客に比べ、勝沼地域の多様な資源に触れる機会につながっている。

以上の分析をレンタサイクル利用時と車利用時で分け、「行動範囲」「訪問先」「移動ルート」「時間」という4つの視点で整理した(表1)。

	車	レンタサイクル	
		繁忙期	繁忙期以外
行動範囲	ぶどうの丘中心	勝沼全域	
訪問先	特定の場所	特定の場所	多様化（ワイナリー中心）
移動ルート	点から点	点から点＋裏道（農道）	
時間	早い	遅い	

表1 レンタサイクルと車利用時の行動特性の比較（筆者作成）

まず、「行動範囲」については、車と比べて勝沼地域全体を行動エリアとしていることである。この点については、通年を通じてのレンタサイクルに優れている点として位置づけられる。

また、「訪問先」「移動ルート」については、自動車同様にレンタサイクルの場合も、特に繁忙期においては、訪問先が特定の観光スポットに集中しており、かつ移動ルートが特定の観光スポットを点から点へとつなぐ移動となる傾向が強い。なお、レンタサイクル利用者の場合、繁忙期以外については訪問先の多様化により、移動ルートも分散する。こうした時期による違いについては、観光客の回遊性向上、魅力の認識の向上を目的とした訪問先・ルートの多様化における課題として残る。

また、「時間」については、移動手段の特性上、一般的に車より自転車の方が移動に時間を要し、さまざまな立ち寄りも可能になることから、滞在時間の長期化に繋がりやすい。

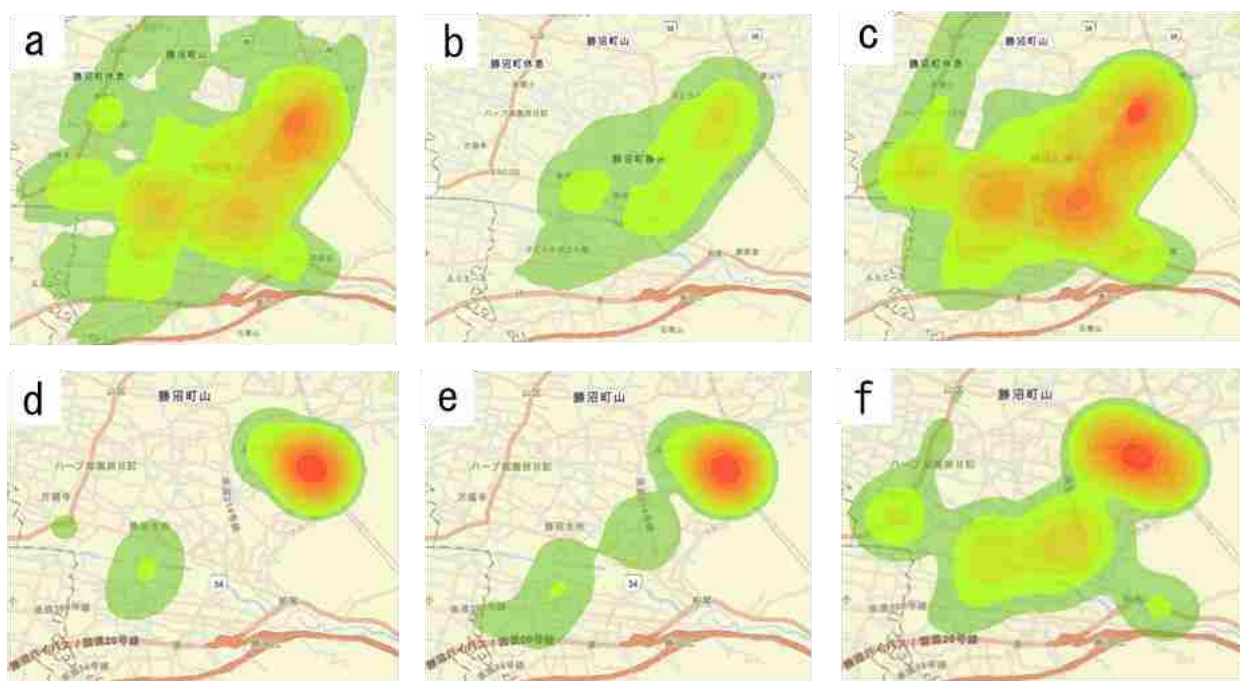


図2 レンタサイクル移動軌跡データ（GPS座標）に基づく移動ルート及び滞留地域の分析（カーネル密度・線密度）
（筆者作成（ベースマップ：OpenStreetMap））

a : 2018年4月（線密度）	b : 2018年7月（線密度）	c : 2018年10月（線密度）
d : 2018年4月（カーネル密度）	e : 2018年7月（カーネル密度）	f : 2018年10月（カーネル密度）

このような状況を踏まえ、レンタサイクルなどの新たな交通手段の普及によって、回遊性向上や魅力認識の向上に資するためには、その長所を活かし、潜在的なレンタサイクル利用者への訴求を通じて、利用拡大につなげていくことが求められる。他方、繁忙期を中心に訪問先・ルートが特定の場所に集中しやすいという状況に関しては、繁忙期以外の状況を踏まえ、勝沼地域の情報発信を積極的におこなうことで、地域内に点在する多様な観光資源の認知を向上させ、ルートの分散化を図ることに繋がれると考える。

5 結論

本研究では、高付加価値の果樹の生産を観光資源とした農村において、来訪者の食生活や属性、観光行動から実態と課題を把握し、農村を観光地としてマネジメントするための手法の一端を明らかにすることを目的に、高付加価値の果樹を観光資源とする農村の典型的な地域である山梨県甲州市勝沼地域を対象地域として分析をおこなった。

その結果、3では、来訪者に対するアンケート調査の分析から、来訪者の日常的な食生活に関して、ブドウの品種やワインの産地に大きなこだわりのない層が中心を占めていることが分かった。また、ブドウ品種についてはリピーター層のほうが顕著に高く理解しているという結果も出た。来訪目的では、すべての来訪者を対象にした場合ブドウ狩りやワインの試飲が上位を占めているが、リピーター層ではブドウやワインの購入が大きく働いていることがわかった。また、現地での訪問先では、自動車を中心とした観光形態ではワイナリー、観光ブドウ園など、全域に広がる多様な観光資源に対して十分な回遊性を持たないことがわかった。

4では、こうした点を踏まえ、域内の移動手段として運営されているレンタサイクルに着目し、利用時のGPSデータに基づき、利用者の行動実態を分析した。その結果、一年を通して勝沼地域全体を回遊しているものの、主要な観光スポットを点から点へと移動するような状態であることが明らかとなった。また、繁忙期では特定の場所が訪問先に集中しやすく、その他の時期ではワイナリー中心ではあるが多様な場所を来訪していることもわかった。

本研究で明らかになった課題を踏まえ、より効果的な観光地マネジメントへとつなげていくためには、レンタサイクルの最適なスポット数などの整備や、それを運営する組織の在り方などより具体的かつ実務的なマネジメント手法をあわせて検討することが求められるが、その点については別稿に委ねることとしたい。

勝沼と歩んだ4年間

岩田 美耶

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

1 はじめに

名古屋市出身の私は、「自然」といえば「公園」を連想する。けれども、それも今となつては昔の話である。勝沼を初めて訪れた時、視界いっぱいに広がる青々としたブドウ畑に感動した。これが今後4年間、足しげく通うことになる「勝沼」との出会いであった。

勝沼を訪れる前、私のブドウに対する認識は、「紫色のものはブドウ、その中でも大粒のものは巨峰、黄緑色のものはマスカット」であった。今振り返るとかなり恥ずかしい話である。このようなずさんな認識しかない当時の私にとって、勝沼は「見知らぬ土地」以外の何者でもなかった。

2 勝沼での4年間の取り組みについて

私は山梨大学と甲州市役所の共同研究として、勝沼における文化的景観に関する調査を4年間おこなってきた。1・2年目は主に価値調査をおこなった。ブドウが実る真夏の暑い中ひたすら傾斜地を登り下りし、地図にブドウ畑をプロットする作業をしたり、観光ブドウ園でヒアリングしたりした。慣れない土地の道を覚えることに必死だったのを今でも鮮明に覚えている。そんな中で、地域の方々が「暑いのに大変だね」、「お疲れ様」と声を掛けてくれたのが嬉しかった。

3年目からは文化的景観の普及啓発活動を主軸として、さまざまなプロジェクトに励んだ。勝沼に関する知識が全くなかった私が、プロジェクトの一環として子どもたちに「勝沼」を教えることになる。

地域における資源及び景観の独自性に対する関心・理解の向上を目的とし、勝沼地域の4小学校の3年生を対象に地域探検をおこなった。子どもたちにカメラを渡し、地域探検の途中で気になったものを自由に撮影してもらった。子どもたちは自然あふれる風景や人物の様子などをはじめ、ブドウ冷蔵庫などの今まで用途を知らなかったものや、保育園など個人的記憶に基づくものを撮影する傾向にあった。

地域探検によって、今までは「ただ見たことがある」という段階であった「日常生活にあるよくわからなかったもの」を、子どもたちが自分の言葉で説明できるきっかけとなり、地域への理解が深まったと考えられる。

子どもたちは「なんだろう」という疑問を持ちながら地域探検をしていた。ただ地域を歩くだけではわからないものがたくさんある。「なんだろう」の気持ちを抱きながら歩くことで、地域に対する「なるほど」が生まれる。地域探検は謎解きのようなものである。

しかし、大人になるにつれて「なんだろう」の気持ちは薄れる。それは、長年住んだ地域

であるが故に、地域を理解した「つもり」になっているからではないだろうか。そんな考えから、子どもから見た勝沼を大人と共有するために「企画展」を実施した。

企画展では、地域探検で子どもたちが撮影した写真をパネルにまとめ展示した。地域の資源などに関する子どもたちの学びを大人と共有する機会となった。この取り組みは、大人が地域を見つめ直すきっかけとなり、普段見慣れている地域の景色から資源の再確認や新発見、地域の独自性に対する理解の向上を可能にした。

4年目には絵本・紙芝居を作成した。小学校高学年を対象として、時代の流れが及ぼす勝沼の変化する部分と変わらない部分について考え、勝沼の歴史や文化についての学習を目的とした取り組みである。「馬頭観音」や「ブドウ冷蔵庫」といった、勝沼における資源や景観の今と昔を比較しながら物語が進んでいく。小学生でも理解しやすい、Q&A形式の絵本・紙芝居である。これにより、普段何気なく地域で見ているものの歴史的な意味・背景に対する理解が可能となり、地域の独自性の継承及び、勝沼に対するアイデンティティの向上が可能になる。

時間の都合で活用までは至らなかったが今後、学校や図書館などの教育現場で役立ててもらえたら幸いである。

3 卒業論文について

大学4年生で執筆した卒業論文では、小学校社会科の地域学習で用いられている山梨県中の社会科副読本における内容分析をおこなった。山梨県の市町村の中でも、甲州市は地域学習に力を入れていることが明らかとなったため、甲州市合併前の旧塩山市、旧大和村、旧勝沼町の副読本の内容においても分析をおこなった。

その結果、旧塩山市及び旧大和村は甲州市の副読本の内容と大差がないことがわかった。一方で旧勝沼町の副読本は、地域の基幹産業となっているブドウ栽培を軸として、地域の発展や暮らしの移り変わりに関する記載がなされていた。

やはり勝沼は特異な地域である。勝沼にとっての当たり前は、実は当たり前でないのだ。それ故に、勝沼の独自性を将来に受け継ぐことは大きな意味を成すと思う。

4 おわりに

今思えば、よそ者である私は子どもたちと同じだった。勝沼のことをよく知らないからこそ、「なんだろう」の気持ちを抱きながら地域を歩いていた。この気持ちと4年という時間は、私にたくさんの「なるほど」を与えてくれた。

文化的景観調査を経て、私が認識していた「紫のブドウ」は、デラウェア、甲州、ベリーA、藤みのりなどに変わった。シャインマスカットの皮は食べるようになった。ブドウ畑にぶら下がるピンク色の謎の液体を「ジベ」と呼ぶようになった。地域中に張り巡らされているただの水路は、扇状地におけるブドウ栽培において欠かせないものだを知った。「なんだろう」から始まる会話は、勝沼の方々が抱く地域への愛を教えてくれた。そして、「なんだ

ろう」が「なるほど」に変わる時、私にとって「見知らぬ土地」であった勝沼は、「第二の故郷」となった。

勝沼は四季そのものだ。春にはブドウの枝の選定がおこなわれ、ブドウ栽培の始まりを告げる。夏には緑が生い茂り、地域中にブドウの甘い匂いが漂う。秋には葉が色づき、10月第1土曜日には聖火が勝沼を巡る。こうしてブドウ栽培は終わりを迎えるのだ。そして冬には、「また来年」とでも言うかのように葉が落ち、次の春に向けてしばしの休息をとる。4度目の「また来年」はいつも以上に寂しく感じる。

4年間の文化的景観調査は有意義で貴重な経験であった。この調査による自らの成長をひしひしとを感じる。そして何より、勝沼の方々と触れ合い、勝沼を知り、勝沼への愛を育んだ日々は私にとって一生の宝物である。

関わっていただいたすべての皆さまに、この場を借りて感謝申し上げたい。

観光を通じて勝沼地域の魅力を繋げるために

高橋 瑞季

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

1 勝沼地域とかかわって感じた魅力

私は山梨県内に実家がありながら、勝沼地域を文化的景観調査まで訪れたことはなかった。そのため、道の右を向いても、左を向いてもブドウ畑が青々と広がっていることに驚いた。勝沼地域がブドウの有名な産地であるということは知っていたものの、実際に訪れるまで勝沼地域のことを本当に「知っている」わけではないと気付いたのである。

大学における専門のひとつとして、また、就職という進路としても、地域づくりという分野を志すことになったのは、大学生活のほとんどで関わってきたこの勝沼地域のおかげであった。大学生活で携わった文化的景観の調査やその関連事業を通じて、地域を「知る」ことやそのために必要な視点、知った地域に対してその魅力を伝えることの楽しさ・難しさを考えることとなり、私の考え方を大きく広げていくきっかけとなったのである。

勝沼地域の魅力は、おしゃれさだけでない親しみやすい観光地であることと私は考える。ブドウやワインは、西洋風の潇洒なイメージを私はもつ。しかし、勝沼地域はそのブドウやワインを主産業としている日本の農村であり、商売っ気のある雰囲気のある観光ブドウ園と、上品な雰囲気のあるワイナリーが違和感なく解け合っている地域であると思う。ワインは当初地域住民が飲んでいたことなど、私のもつブドウやワインのイメージは崩れ、むしろ庶民的なものであるような気がしてきていた。確かに、ブドウ畑を眺めながらワインを優雅に飲むのも素敵であるが、原色の目立つ幟が立つ観光ブドウ園を訪れ、さまざまな品種を前にたくさん試食したり、ブドウを買うのも同じくらい魅力があると感じる。勝沼地域は、おしゃれさと親しみやすさが同居しているのである。

このように、文化的景観調査を通じて私は勝沼という地域を知り、さまざまな地域にあるそれぞれの魅力を伝えられるような地域づくりを考えたい、そして、今のささやかな当たり前を残していきたいとも感じるようになった。

2 勝沼地域における文化的景観の保存活用策のひとつとしての観光

(1) 文化的景観調査から卒業論文へ

勝沼地域は戦後観光地として大きく発展し、現在においてもブドウやワインを中心とした観光産業は、地域住民の生活と一体不可分のものである。そのため、文化的景観としてもブドウやワインにまつわるストーリーは、観光客にとっても目にみえる形で分かりやすく、上記で述べたような勝沼地域の魅力を伝えることと繋がりやすい。文化的景観の制度は地域資源の価値を整理し、ストーリーとしてブドウなどの観光資源とセットにして観光で活用することで、勝沼地域の新しい観光のかたちをつくることができると考える。

文化的景観の調査を通じて、卒業論文では勝沼地域の観光地としての現状や今後について考えたいと思うに至った。

そのため、高付加価値の果樹を観光資源とする地域における、来訪者の特性と地域の多様な魅力の発信を前提とした観光地マネジメント手法について、特に域内交通という観点を中心に考察することを目的に、①勝沼ぶどうの丘における観光客向けのアンケート調査を通じた観光客の食への志向性、来訪目的、観光行動などの相関性に関する分析、②レンタサイクル「ぐるりん」利用者の行動特性の分析をおこなった。

以下に、これら2つのテーマで分かったことを簡潔に述べるが、より詳細な論文の内容については附録の卒業論文梗概を参照されたい。

（２）ぶどうの丘での観光客向けアンケート調査の実施から見た勝沼地域の現状と課題

まず仮説として、日常の食生活の嗜好（ブドウをよく食べている、ワインをよく飲んでいるなど）が、観光の動機として強く働くのではないかと考えた。それをもとに、日常の食生活と観光動機の関係性を明らかにするため、ぶどうの丘にて来訪者へのアンケート調査をおこなった。なお、質問内容は、①ブドウ及びワインの日常的な摂取に関する設問、②勝沼を訪れた来訪目的に関する設問、③交通手段や観光ルートといった当日の観光行動に関する設問に、来訪者の属性を設問項目として加えている。

アンケートの分析から、来訪者の日常的な食生活に関して、ブドウの品種やワインの産地に特にこだわりのない層が中心であることが分かった。また、ブドウの品種についてはリピーター層のほうで顕著に高く理解していた。来訪目的では、ブドウ狩りやワインの試飲が上位を占めているが、リピーター層ではブドウやワインの購入が多いことがわかった。また、現地での訪問先では、自動車を中心とした観光形態ではワイナリー、観光ブドウ園など、全域に広がる多様な観光資源に対して十分な回遊性を持たないことがわかった。

以上のことから勝沼地域の課題として、観光行動はむしろリピーターであるほどブドウやワインの購入といった勝沼地域の魅力を堪能しているとはいえない行動に収束していること、行動範囲においても、ぶどうの丘を中心に狭い範囲で移動している傾向が強いことから、勝沼地域全域への高い回遊性を持たせるような仕組みをつくることが考えられる。

（３）レンタサイクル「ぐるりん」の利用状況・可能性・課題

レンタサイクルに代表される自動車以外の域内交通手段は、地域の魅力を積極的に発信し、観光対象を点から面へと展開するための仕掛けのひとつとして有効であることから、現在、甲州市によって運用されているレンタサイクルシステム「ぐるりん」に着目し、利用時に得られた移動軌跡データ（GPS 座標など）をソフトウェアを使用して解析することで観光客の行動特性を分析した。

その結果、1年を通して勝沼地域全体を回遊しているものの、主要な観光スポットを点から点へと移動するような状態であることが明らかとなった。また、繁忙期では特定の場所が

訪問先に集中しやすく、その他の時期ではワイナリー中心ではあるが多様な場所を来訪していることもわかった。

今後、勝沼地域の多様な魅力を観光客に発信していくためには、観光客の地域全体に回遊する仕掛けが不可欠であり、レンタサイクルの最適なスポット数などの整備や、それを運営する組織の在り方などより具体的かつ実務的なマネジメント手法をあわせて検討することが求められることが指摘できた。

3 勝沼地域の観光と文化的景観の役割

文化的景観の地域の歴史や文化などのストーリーは、観光資源としての付加価値を高めるうえでより魅力を向上させることに加えられると考えられる。勝沼地域においては、文化的景観として語るうえで観光は外せず、その観光も文化的景観は受け継ぐためのひとつのツールになりうと思う。文化的景観の主たる担い手は地域住民であるが、地域を訪れる観光客をはじめとした来訪者（交流人口）も、文化的景観の保全に対して役割を担いうと思う。時代を経てさまざまな人々の手で作られたものを保存するだけでなく、今を生きる私たちも活用し、将来に繋げていくことは、大切なことであると感じる。

学生生活を通して、勝沼地域の歴史や文化、ブドウやワインに携わる地域住民を知り、文化的景観の制度について理解を深め、地域づくりを考えるきっかけとなった。勝沼地域での4年間の取り組みをきっかけに、大学卒業後も地域づくりに携わる職を得ることができたため、今後も勝沼地域での経験を大切にしながら、さらに実践を重ねていきたいと考えている。